魔法少女マジかる?めたモル！かな☆彡

八紘新音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女マジかる？めたモル！かな☆彡

【Ｎコード】
Ｎ９３７０Ｘ

【作者名】
八紘新音

【あらすじ】
尋常じゃないアニオタ少年、石村高師（１６、後一週間で１７歳）はリアルに幻滅し、アニメ鑑賞を人生唯一の目的として生きていた。
―アニメの世界に行きたい、リアルなんてどうでもいい―そんな少年のもとに、小さな妖精が現れ、そしてついに彼はアニメの世界へ。
そして、魔法少女に！？
さあ、魔法少女夢崎かなの大冒険がはじまるよー♪

1（前書き）

前作、オカルト科学の擬天使録とは全く毛色の違う作品です。今回はかなりコメディーでギャグな話だと思います。

そして、かなりマニアック。一部の人にしか分からないだろうアニメネタが満載（とくに、某声優花澤香菜絡みのネタは結構ふんだんに取り入れています）、また若干のエロ、全体にわたって変態が主人公のお話なので、リア充はご遠慮ください。あと、二次元を否定する方も一切ご遠慮ください。そういう方には不適切な作品となっております。

1

「待って下さい！待って下さい！お兄様！」
何処かで声がする。幼い女の子の声だった。俺は振り向く。けれども人影は存在しない。
「兄様！兄様！！」

声の元を辿り俺はあたりを見渡す、そしてかけ出す。
「何処だここは？」
知らない場所だった。見たこともない場所だった。ここは日本か？何処の国か？それさえ分からなかった。視界に広がるのはだだっ広い草原、青い空。それだけだった。見慣れた景色ならあってしかるべき電灯や鉄塔、店や看板、信号機、アスファルト、そのすべてがまるで存在しない。ただの草原。少なくとも日本ではない。日本国内にこんな広い場所は、俺の知る限り存在しない。北海道でさえ、視界の向こうには必ずと鉄塔ぐらいはあるものだ。
外国だろうか。だが俺の直感は違うと告げる。なぜなら、この世界はあまりにも不自然なのだ。あまりにも絵画的で、象徴的で、印象的。そう、まるで、絵の中の世界に飛び込んだのかと錯覚させる、そんな光景。人工物の一切存在しない草原は、あまりにも造形美的で違和感を覚えさせる。
(まさか……、俺は異世界にでも召喚されたのか？)

俺はかけ出す。だが、草原はとめどなく続く。何処まで言っても青い草原は広がるだけだ。いつか、何処かで見たような、青い草原……。
俺は焦る。不安になる。湧き上がる不安感を掻き消そうと、あるいはごまかそうと、俺は途方もなく走りまわった。だが何も無い。幻聴か、いや今見ている景色も幻覚かもしれない。

「キャァあああぁッ！」

悲鳴がした。さっきの女の子の声だった。若いと言うより幼い、そんな悲鳴を遠く似感じる。俺は声のした方向へ一直線に走った。

するとそこには、黒い、真っ黒な塊。それが拡大しながら近づいてくる。

何の冗談だ！俺は踵を返して精一杯走って逃げた。だが、闇は更に迫り来る。闇は更に大きくなって空をも包むくらいの大きさになった。そして俺は、それに飲み込まれた。

あたりが闇に包まれた。真っ暗だ。何も見えない。何も聞こえない。そして俺は死んだ。　見知らぬ世界で消えてなくなった。誰にも知られず、誰にも助けてもらえず。

A―1

「ぐあっ！」

叫び声と共にベッドを飛び起きた。ぼんやりする視界に映ったのは、窓から差し込む光、緑色のカーテンの隙間から差し込む真っ白な光。俺は部屋中を見渡した。白い壁に、白い天井、天井からぶら下がった電灯、机に、ベッドに、衣装ダンスに、漫画ばかり並んだ本棚。どれもこれも見慣れた日常の光景だった。

汗を拭う、体中変な汗でべっとりしていた。なんだ夢か……

携帯の時計を確認した。時刻は正午十二時を過ぎていた。

―俺の名前は石村高師（いしむらたかし）、元気いっぱい、青春真っ盛りの十六歳だ―今日も寝坊した。いつもの事だ。別に咎められることはない。なぜかって？　そりゃ決まっているだろ？　学校には行っていないからだ。いや違う、不登校ってわけじゃない。ニート？　それも違うぞ。もちろん、俺がこうして平日の昼間からジャージ、Tシャツのパジャマ姿で悠々としていられるのにはきちんとした理由がある。なぜなら俺は既に高校を卒業したも同然なのだから。それもたった一年で。

はじめに断っておくが、この日本に飛び級制度は存在しない。俺の肩書きは世間で一般的には「高校中退」もしくは「中学卒業」と称させるべきだろうが、「高校卒業程度認定試験（通称高認）」というものを持っているので高卒と同等の学力を有していると一応そういうことになっている。（もちろん建前上の話であるが）

すなわち、俺は高校三年間に学ぶべきことを一年の間に終わらせたのだ。これは休み時間に宿題をした人は帰ってからやらなくてもいいという理論と同じべく（むろん、その人が宿題をやっていないいいという理論と同じべく（むろん、その人が宿題をやっていない事にはならない）後二年好きに使っていいという理屈が成り立つ。

――てな感じで、物語の序盤の主人公ぽく、脳内ナレーションをやってみた――

ベッドから起きて、部屋を出て廊下を歩いて階段を降り、洗面台に立つ。

鏡に写った自分を見ると……眼の下にクマ、そして充血した目、何となく青白く不健康さを感じさせる顔色。まるで主人公足り得ない。俺は心底落胆した。

それだけではない。メガネを掛けてよく観ると、ところどころに黒い点、無精髭が点在する。俺はさらに幻滅した。もちろん男なのだからあって当然なのだが、いや決して女装趣味があるとか、男である自分にコンプレックスを抱いているとかそういう意味ではない。

そう俺が幻滅しているのは「おっさんの階段のぼるー♪」この現実にだ。

なぜかって？そんなも決まっているだろう。大人になんかなりたくないからに決まっているだろう。いやもっとはっきり言おう、そう、俺は大人どころかこの世の人間ですらありたくないと思っている。俺がなりたい物それはすなわち……

アニメの主人公だ！

要するに、俺はこんな腐った現実に幻滅している！だから俺は二次元に行きたい！そう思っている！

なのに、こうして俺は歳を取る一方、しかも最悪なことにあと一週間で九月十日。すなわち俺の誕生日。誕生日なら嬉しいだろう？おめでとうって言ってほしいいだろうって？

なわけない！なぜだか分かるか？分からないのか豚野郎！

いいか、アニメの主人公の年齢は往々にして十代中頃、例えば某ロボットアニメなら十四歳、某願い事が叶うボールを集める話も十四歳だ。要するに、物語の序盤で登場する主人公の年齢は中学生かせいぜい高校1年生がほとんどなのだ。

もちろん物によっては（青年誌系の話であれば）十代後半から二

十代前半という話もないわけではない。だがしかし、これだけは言える、年齢を重ねるごとになれる主人公の数は減っていく一方であるということ。
（※あくまでも個人的見解です）

俺に残された選択肢は少ない。そしてそれは好いたずらに年を重ねるごとに減っていく一方なのだ。なのに、どうして、いつまでたっても！二次元に行けないのか！

ならばせめて、アニメの主人公のような現実体験があればなと思っていたが、それもナッシングだった。
初恋のクラスメイトは高校入った途端、茶髪ビッチに変死（へんしん）しやがって、複数の男と付き合っているという噂だし、青春スポコンアニメっぽく部活に情熱を注いでみようとしたものの、ただキツイだけだったし、他にも、もしかしたら神様居るのかも？と思って神社行ってみたが神どころか美人の巫女さんすらいない、当然、妖怪も天使も宗教違うけどシスターさんもいないし、その他、生徒会に立候補（した段階で教師に却下される）したり、街の裏路地を無味に歩いてみる（ヤクザどころか野良猫以外何も居ない）、後、空を飛んでみようとしたが怖かったのでやめた等色々あるが、どれもダメだった。
このクソッタレな現実には退屈な日常しか存在しない！それが俺の人生十六年で出した今のところの結論だ。

顔を洗い終えて、俺はリビングダイニングへと向かった。こういう、何の変哲もない家庭の日常のシーンは物語の序盤を予期させるのだが、当然何一つドラマチックな事はない。
視界に飛び込んでくるのは、机の上に朝食として用意され、放置されたままの目玉焼き、
「たかしくんへ、今日は夕方までに帰ってきます。お昼は冷蔵庫の

中に野菜炒めの残りがあるのでそれを食べておいて下さい」なんて、置き手紙が置いてあるだけだ。
　冷めているので当然マズイ。今日みたいに昼間で寝てた日はありがた迷惑だったりする。

「さて、飯も食ったことだし！」
　と、俺はさっさと食器を流し台に放り込んで足早にリビングを退散。そして二階の自分の部屋へやや駆け足で上がる。ちょっと急いでいる理由はもちろん、彼女とデートの約束があるとか友達とゲーセン行くなどというクソッタレな外道で下等生物の性癖のような悪趣味予定の為ではない。つうか、そんな相手一人足りとも存在しないし！
　そう、俺が今からなさねばならないこと、それは……
　アニメだ！
　部屋の戸の前でグーをして一人叫ぶ俺。何気ない日常は俺にとって地獄でしかない、だからそう、こういうどうでもいいシーンでも一人頭の中のナレーションに語らせていかにもアニメの主人公的なシーンを演じてしまうのである。

　俺にとってアニメは生命の源。このクソつまらない日常の現実から解き放たれて感動と興奮とロマンの世界に引き込み、そして俺の傷ついた心を癒してくれる悠久の時。俺の人生で最も有意義で最も愛すべき時間である。

　そんなわけで、今朝方睡魔に負けて途中でやめてしまったＤＶＤの続きを見ます。なので絶対に邪魔しないで下さい。ちなみに、俺が最も大嫌いなことは、感動的なシーンの途中で邪魔をされること。それだけで十二分に殺意を覚えるから要注意だ。

「さあ、それでは……」

と、俺は部屋のベッドからちょうどいい位置に置かれた液晶テレビの舌にあるDVDプレーヤにブルーレイ版アニメDVDをセットして、枕を程良い位置に整えてテレビ画面真正面に視点が合うように寝転がってからリモコンのスイッチを押した。

軽快なリズムと共に流れるオープニング。それだけでこの素晴らしく汚れのない二次元世界経と引き込み視聴者を魅了する。もはや現実のことなどどうでもよい。この世の汚れをすべて忘れ、美しいものだけでかたどられた物語の世界へと誘うのだ。

「助けて！」

変な声が聞こえた。アニメのセリフではない。まだオープニングだ。

俺はベランダへ出た。何処の糞ガキだ！鬼ごっこなら公園でやれ！だが、あたりを見渡しても何もなかった。まあいい。部屋へ戻りベッドへ横たわる。遠くにチャイムの音が聞こえた。それだけで減点ものだ。俺

俺はスピーカからコードを伸ばしたイヤフォンへと変えた。音源が近くの方が臨場感があるし、遮音効果もあるからだ。一番いい方法はテレビのスピーカーとPC用のスピーカを耳元のおき、さらにイヤフォンを軽く装着した状態だ。こうしただけで簡単に映画館なみの音響を味わえる。あ、ちなみアニメを見る時間はやはり夜の方が良い。周りが暗いほうが集中できるからな。まあテロップには「部屋を明るくして見ましょう」てなことを書いているがアニメのための人生だ。目が悪くなろうが後悔は無い！

さあさあDVDをっと。（ああ、さっき途切れてしまったからもう一度最初からだな）

と、改めて初めから再生。素晴らしいオープニング、そして始まるアニメのワンシーン。

A―2

「助けて！誰か！」
またこのやろう！何処の糞ガキだ！これだから昼間はダメなのだ。だから夜中心、昼夜逆転生活をしている。昼間に観るのは基本的には二回目以降のものかあまり対して面白いとは思わないものにしているのだが、それだと時間が足りないし、明け方に切った話の続きも気になって仕方がない場合には対処できない。
「助けて！誰か助けて！」
「しつこいぞ！クソッタレ！静かにしろ！」
俺は絶叫しながら枕を部屋の壁めがけて投げつける。完全に八つ当たりだ！それだけ俺は苛ついていた。何度も言おう。俺は誰よりもアニメが大好きだ。そしてその時間は誰よりも大切にしたいと思っている。故に、俺にとってアニメの時間を邪魔されることは許しがたいことなのだ。それだけで万死に値する！！なのに！
クソッ！俺はやり場のない怒りを布団にぶつけそして頭を掻きむしる！
「くそったれ！アニメが見たい！アニメの邪魔をするな！」
「現実なんてクソだ！アニメさえじっくり見れない！現実なんてもうやだ！！！」

俺は、ベッドの下の収納棚、クローゼット、タンス、衣装ケース、机の引き出しを次々に開け放つ。こんなことして何のみ意味も無いというのに……
そうこの時、俺は完全に狂っていたのだ。完全に。アニメが見れないことに極度のストレスから、精神的ダメージはマックスだった。俺は部屋中をそれこそ興奮した猛獣のように歩きまわって、あちこち散らかし回った。タンスの中の服を引っ張り出し、ゴミ箱を蹴散らし、机の引き出しを勢い良く引いて振り上げようとした。

「だぁぁぁぁぁぁッ！」
その時だった。
「ふえッ」
そんな声がした。もちろん、声の主は俺でない。俺はテレビを一瞥した。だが、ＤＶＤは停止されたまま。現実のくだらぬムダ話しかしないバラエティしかやってない地上波なんて見るはずもない。
だとしたら……いや、それ以上に気になるものがある。人形だ。
大きさというか、身長は十五センチ弱　透き通ったような水色をして、十三、四歳くらいの格好をした女の子の人形。ファンタジー物によく出てくるような短いマントを見にまとい、体にぴったりくっついた胸と胴体の部分だけの甲冑を模したコスチューム、そして、透けて太ももが見えてしまっている半透明のスカートを履いて、背中に半透明かつ少し虹色に輝く蝶のような四枚羽を背負った、妖精の人形。それが横たわっていた。
なんだこれは？こんなフィギュアを買った覚えはない。第一こんなアニメ知らないし、それに俺の興味対象は基本的にアニメ作品のＤＶＤを中心とする、それを取り巻くグッズなどおまけでしかない。よほどキャラクターが気に入ったか造形が素晴らしいものでなければそこらのオタクのように無闇矢鱈に手当たり次第買ったりしないのだ。なので買ったフィギュアは瞬きする間で判別できるし、どれひとつ正確に覚えているはずだ。
「こんなキャラ知らねえぞ」
俺が知らないということはすなわちオリジナルか余程のマイナーキャラなんだろう。

俺は全体をよく観察すべく、そのフィギュアの足を持ち上げた。フィギュアは真っ逆さまになる。半透明ノスカートが捲れ上がり、パンツが丸見え。
「キャッ！」
人形が慌ててスカートを抑えた。そして涙目。顔を真赤にしてこ

ちらを覗いている。
そんなわけない。これは幻覚だ。アニメを見れないことに対する苛立ちから来る幻覚だ。
俺はそのフィギュアを机の上に置いた。やや乱暴に。バンッ！と音がするくらい。
「イタイ！」
人形が動いた。床にうつぶせに叩きつけたのに、ゆっくり手をついて立ち上がる。
そして俺に指を指して怒りながら言った。
「ちょっと、何するんですか！イタイじゃないですか！」
「げ、幻覚、幻聴？そうか禁断症状！」
アニメを集中して見れないことに対する極度のストレスから、ついにこんな幻覚を生み出してしまった。仕方がない、こうなったらむりやりにでも見るしかない！
そう思って、ＤＶＤの再生ボタンを押す。だが、突然テレビがつかなくなった。俺は焦る。テレビをバンバン叩く。だがテレビはビクともしない。ふと、電源スイッチの隣のランプを確認すると電源ＯＦＦ時でも付いているはずのランプがついていないではないか。無論コンセントは刺さっている。なんてこった！緊急事態だ！俺は行きが苦しくなった、過呼吸だ。ヤバイ早くしないと！発狂するう！！！
俺はそのへんな幻聴、幻覚を無視してしきりにテレビのコンセントを抜いたり入れたりしてテレビを何とかつけようと試みる。だが、変な幻聴はしつこく絡んでくる！
「ちょっと！聞いてるんですか！」
「うるさい！いまアニメの最中なんだ！話しかけんなボケ！」
幻覚だろうがなんだろうが、関係ない。アニメを見れないことは俺にとってこの上ないストレスである。こんな禁断症状が出るくらいだ。一刻も早く対処しなければ。
「くそっ！なんでだ！こんな狙い撃ちに！ああああああっ！アニ

メナジーが！アニメナジーが切れるぅぅっぅぅぅっぅぅっ！」
頭をかきむしりながら部屋中をうろつく俺！幻聴人形は指を加えて首をかしげた。
そうだ、リビングだ。この時間はだれもいないはずだ。と俺は部屋を飛び出して一階へ。すると、今度は外からゴゴゴゴォ！っと轟音が。俺は二階の部屋荷掛け戻って、ベランダの外を確認する。なんと三軒隣の家の前で工事をなんてしてやがっているではなか！
もやはテレビの確保云々ではない。俺のアニメ生活を現実が邪魔しやがっているのだ。なんてこった。クソ！クソ！クソ！！

「あのー」
「しつこいなボケ！」
俺は幻聴人形をおもいっきり掴んだ。
「い、イタイです！離して下さい！」
「お、オイお前……。俺と会話できるのか？」
「え、ええまあ。見えているんでしたらもちろん」
パチリもう一度目を見開いて人形を確認する。
そういや手触りが人形よりなんというか柔らかい。
「ちょ、ちょっと何処触っているんですか！」
親指がちょうど胸のあたりに当たっていた。と、言ってもこいつの場合殆ど無いに等しかっただが、ふとその声に力を緩めると、人形はひとりでに浮き上がってしまった。
「と、飛んでる！？」
「当たり前です妖精ですから！あ、申し遅れました。わたしは世界の守護妖精トゥルルと申します。ええと、わたしはこの世界とは別の世界から来てしまったのですが、守護となるべきキャラさんを探さないといけないのです」
「いやいきなり自己紹介されても。てか、意味不明だし」
案外落ち着いている自分がいた。いや、俺はこの時少し興奮していた。

「確認するがお前は幻聴でも幻覚でもなく実体としてここに存在するのか？」
「実体としてか、と言われますと困りますが、わたしはちゃんとここにいますよ？」
ちょっと、状況を整理する。今俺はものすごくいらついている。理由はアニメを見ることが阻まれたことによる極度のストレスだ。そして、その禁断症状からフィギュアが独りでに動き出して語りかけてくるという幻聴幻覚まで見えている危ない状態だ。
「あの……」
俺が一人、顎に手を当てて安っぽい探偵アニメの推理シーンのようなポーズで部屋を歩きながら考えをまとめていると、自称妖精はひょろひょろ俺の周りをゆっくり旋回した。
様子を伺っているようだ。そして俺も状況を次第に理解し始めた。
「そうか！お前はアニメの世界から来た妖精だな！俺をこのクソッタレで窮屈で汚れ現実世界から解き放ち、夢とロマンと希望に満ち溢れ、暖かく、柔らかく、美しく、そして一点の汚れもない、アニメの世界へと誘ってくれるのだな！そうだな！！」
俺は飛んでいるそいつをつかむと、思いっきり揺すって叫んだ。ついに来た！！俺はいよいよこの世界から解放される。そして二次元へゆくのだ！！
「わあああああッ！離してぇぇぇえッ！」
妖精は俺の手の中で揺れていた。だが俺の眼中にはない。
「そなんだろ！！」
「あああああ……やめてぇえ」
「ソ・ウ・ダ・ヨ・ナ！！」
「ぁいッ」
それを聞いて俺はニンマリ。そしてガッツポーズ！！妖精はフギャア！と絶叫。
危うく妖精を握りつぶすところだったので手をゆるめ開放した。
トゥルルは蚊取り線香でやられた蚊のように緩やかな螺旋を描い

て落ちてゆく。

「さあ出かけよう！アニメーのセカイ！」

　俺は、ナイフ、ライフル（エアガン）、パンツ、カバンに詰め込んで、身支度を整える。アニメが見れないことによる苛立ちはもう何処か遠くへ飛んでいた。

「ちょっと、何やってるんですか！まずは説明！説明を聞いて下さい！わたしはこの世界の住人ではないんですよ！それを聞いて驚かないのですか！あなたはこの世界を本当の世界だと思っていますが、実は違います！この世界はわたした達の居る本当の世界で役目を果たさなかったり、重大な罪を犯した人が、その罪を解消するためにですね、作られた仮初の世界なのでして、つまり、あなたは本来その罪を償う必要があるのですが、それを特別に免除される権利を得たというわけでして、だから、わたしと共にー」

「知ってる！そんな事は！この腐った現実が本当の世界のはずがない！アニメこそ本当の世界なのだ！だからさっさと俺を本当の世界に連れてゆけ！」

「ちょっと待ってください。そんなに理解が早いと逆に気持ち悪いです。普通は驚きますよ？マニュアルにも書いてありますし、否定したりしないんですか」

「何、俺は物分かりが非常に良いからな。だいたいのことは解っているし、どうあがこうと今俺のいる世界が本当じゃないことには変わらない」

「じゃあ、今あなたのいる世界ではどんなに努力しても、どんなにつらい目にあっても決して報われる事無く、辛くて苦しいことしか起きないっていうことも知ってます？」

「現にそうじゃないか。そうしていたずらに年を重ねてゆくだけだ。それが人生だ！」

「じゃあ……、あなたがこの世界にいる意味は？」

「意味等ない！あるとすれば唯一アニメを観るため！それ以外一切

存在しない！」
「す、すご。完璧です。なんという事でしょう？糞世に落ちた身でありながら一体……」
興奮しながら絶叫の独演会を繰り広げている俺の後ろで、トゥルルは小さくつぶやいた。
「糞世？糞世ってなんだ？」
「え、ええ。今ここにあるこの世界のことです。不要で汚れた、糞、つまり……うんこのようなものを集めた肥溜めの世界という意味らしいです」
トゥルルは手元にホログラムのように浮かび上がる本を読みながら辿々しく語った。
「糞世か！そりゃいい、現に、現実はクソッタレだしな！フゥアハハハハハッ」
俺はまるで中二病のマッドサイエンティストのように腰位手を当て声高らかに笑った。
「で、俺はその糞世から解放されてお前の居る二次元世界に連れていってくれるんだろ？」
「二次元？」
「三次元とは正反対の、穢れ無き世界だ。いいか、このクソったれな三次元世界では、どんなに悲劇的ドラマが起きようと、試練を乗り越えようと、決して報われることはないんだ。ただ辛い目にあって、耐えて、耐えて耐えるだけ。終わった頃には白髪の爺ちゃんだ。だが、二次元は違う、努力、忍耐、根性。試練を乗り越えたものには必ず栄光が与える。主人公なら必ず輝けるんだよ！」
「正確には、輝けないパターンもありますが、それはやるべきことを怠った場合ですね。概ねあってますけど、どうして、わたし達の世界のほうが次元が上なのに、二次元と、下位に置いているのですか？あなた達は自覚が足りません！」
「言葉なんてどうでもいいだろ？要は、三次元は糞、二次元は最高ってことには変わりない、あてがう言葉がないからそうなっている

だけだろ？まあ、俺はお前の言う、糞世って表現が気に入ったから
それを使うが、お前らは自分たちの世界をどう呼ぶんだ？」
「えっ？あの……わたしたちの世界は特に区別する必要無いので呼
び方もないのですが」
「そうか。じゃあいいや。早速連れていってくれ」
　言葉の論争なんてどうでもよかった。俺は一刻も早く二次元世界
に行きたかったのだ。　だが、トゥルルは当惑の表情を浮かべる。
そして言った。
「あの、一応決まりですから、最低限の説明くらいはさせてもらい
たいのですが。それと、その前のお名前を教えていただけませんか
？契約の歳必要ですので」
「あ、そっか。俺はその……石村高師……十六歳で後一週間で十七
歳だけどな」
「あの、なんでそんなに元気が無いのですか？」
「当たり前だろ。後一週間したら俺はまた一つ歳を食うんだぞ。そ
れは要するに、なれる主人公の数がまた減るってことじゃねえか。
冗談じゃねえ」
「あ、それなら大丈夫ですよ。わたし達の世界では年齢は自由に設
定できますから」
「ホントか！」
「ですからちゃんと説明を聞いて下さい」
　わかった。俺は軽く返事して、カバンを下ろしベッドに腰を下ろ
した。
　トゥルルは俺の正面に浮いて、一息。そして、短いマントの中か
ら先に星の着いた棒を取り出して、緩やかなカーブを描く。現れた
のは半透明な黒板と教卓。そして、エッヘンとわざとらしく咳払い
をして、ご丁寧にメガネまでかけた。
「それじゃあまず、この世について説明します。あ、この世と言っ
ても今私達がいる世界ではありませんよ。わたし達の住む—」

「それはさっき聞いた。要するアニメの世界の事なんだろ？」
「それは正しい表現ではありません。アニメというのはあくまでもこの世界の住人に改心を促す目的で作られたわたし達の世界で起きた出来事の映像記録に過ぎません。それもだいぶカットしていますし、あ、ちなみにアニメ以外の形でも、漫画やライトノベル、ゲームなんて形で配信されることもあります。それはですねー」
「てことはあれか、アニメや漫画の元となるイメージを作者や監督に送り込んで描かせるってわけだろ？なるほど、だからアニメや漫画で元気になるのか！心が浄化されるんだ」
「なんでまた。何も言っていないのに……」トゥルルはやや不機嫌そうな表情を浮かべた。

「もう、わたしの役目ないんじゃないですか」
「じゃあ聞くけど、なぜこの世界の人間は皆自分の居る今を本当だと思い込んでいる？」
「ああ、それはですね、本当の世界では自分が中心、つまり主人公になれる為です。そのため、まあある意味なんでも自分の思う通りにやってしまえなくもなく、と言っても力を付けた後の話ですが、そのために周りのキャラさんを無視した傍若無人な行動を取ったりして世界観を壊してしまうことがあるのです。そういうダメな人たちが糞世に落ちて、自分の思い通りに行かない、苦しくて、辛い世を、脇役以下の生活を味わって改心を促すというわけです。そのためにこの世界を唯一無二の本当の世界だと思い込まされているのです。ちなみに、この世界で主人公的な人生を送っている人、努力してある程度報われる幸せな人は、もともと罪の軽い人か、死んだ後主人公になることを約束された例外的な存在です。そういう人は極稀で、普通はそれこそドラマのヒロインのように次から次へと悲劇がやってくるのにちっとも報われないのです」
「へーそうなのか。ならきっと俺の将来もろくでもないんだろうな」
「ちょっと待ってください。ええと、たかしさんと呼んでも？今呼

び出します」
「べ、別にいいけど……」
なんとなく俺は自分の名前が嫌いだ。なぜなら主人公らしくないからだ。
「出てきました」
そう言って、トゥルルは壁にスクリーン映像を映しだした。
映しだされた画面には……

A―3

１７―２０歳　高校中退後、実質、ニート生活を四年。
２０―２２歳　二浪して、三流大学へ入学。二年留年した後退学、その後三年間ニート
２７歳　　ブラックＩＴ企業へ就職→二週間後、飲み会の強制参加にブチギレ退職
２７―３１歳　ニート
３１―３５歳　ほぼ半年サイクルで、派遣→ニート→派遣→ニート→バイト→ニート
３５―３８歳　　うつ病で入院→退院→ニート→バイト→社会復帰失敗。４２歳までニート

「まだ続きがありますので」
「もういい！！」

なんだこの人生は。最悪すぎる！俺はこんな人生を送るのか？冗談じゃねえ！
「ちなみ、極普通の平凡な人生を送っている人たちは、巻き込まれて仕方なく落ちてしまった人たちで死んでからはモブキャラとして登場します」
「そんな事はどうでもいい。俺はこのまま生きてたらさっきのような人生を送るうだろ？だから今すぐ！俺をアニメ世界に連れて行け！」
「そんな横柄な態度を取る人の言うことは聞けません」
「連れて行って下さい！お願いします！」俺は手をあわせて、そのあと土下座した！アニメの世界に行くためだ。土下座だろうが、何だろうがやってやる！
「わ、わかりましたよー」

そんな俺にトゥルルは当惑しながらも一応聞き入れてくれたらしい。
「まだキャラさんのことについて説明があるあるのですが。もう聞く気ないですよね。
「そ、それじゃあまず、どういう世界に行きたいですか？男の方に人気なのは……」
「ええと……」
いざ、行くとなるとやはり迷う。どういうジャンルがいいだのだろう。
「ロボット物や、ラブコメやハーレムものなんて言うのも人気なんですが……」
なぜかトゥルルが口ごもる。なにか言いたげで言いにくそうな表情だ。だがしかし、それは俺も同じだった。そうなのだ、どうせ行くなら一番自分が好きなものにしたい。けど。それはいくら俺がハードコアなアニメオタクであると認識していてもやっぱり言い難いものだ。だがしかし、こんなチャンスはもう二度とないだろう。恥じらいなど捨てるべきだ。俺はそう思って決心する。そして言った。
「ま、魔法少女……」
「えっ？」
「魔法少女だよ！魔法少女！！」
沈黙が数秒……。
トゥルルはパチリ目を見開いて俺を見つめる。俺は視線をそらして、床の模様を見つめるのがやっとだった。
「あの……、それはどういう？」
「う、うるさい！俺は魔法少女モノが好きなのだ！悪いか！」
「え、ええ……」
「出来ないのか？」
「なくはないです。むしろ、ロボット物やラブコメものは専攻して

なかったのでそっちよりは楽なのですが、ああ、そういうことか。
魔法少女モノに出てくるクラスメイトの男の子をやるんですね？でもそれで魔法少女と結ばれるパターンは難しいと思いますよ？基本的にそういう話はあんまり好まれないみたいですから」
「ちがう！魔法少女に恋愛など言語道断だろう！魔法少女モノに男キャラなんて居られねえんだよ！そんなのヒロインの兄弟か父親位で十分だ！」
「え？」
「わ、悪いか」
また沈黙が数秒……いや、あたりが凍りついたとでも言うべきだろうか。
トゥルルも俺も一歩も動かない。まるで息すら殺したかのように静止。

「だ、ダメです！」
トゥルルは物凄いスピードで後ろへ下がる。まるで身の危険を察知した小動物のように、俺から距離を取ろうとした。しかし俺は見逃さなかった。ハエをつかむのごとく右手をすかさず前に出して妖精をキャッチ。捕まえて勢い良く自分の顎の下にマイクを持つように持ってくると、「なんで逃げるんだボケ！」と叫ぶ。
「ちょっと、そういうのは無理です。わたしアダルトはやりません！」
「誰がエロをやれって言った！」
「だって、男の子が女の子になりたいって言ったらそうに決まってます！そう習いました。だからそういうのは引き受けちゃダメってー！」
「ちょっと待て！俺はそんなもん望んどらん！」
「えっ、ほ、ホントですか？」
「ホントだ。嘘ならここにある俺のコレクション全部捨ててもいい。それは俺にとって命を捨てる以上のことだ」

　そう言うと、トゥルルは安心したのか表情を緩めた。なんて勘違いをしやがる。俺は単に純粋に魔法少女になりたいだけなのに。それにエロ目的なら男じゃねえ意味ねえし。

「でもなんで？魔法少女物って女の子に一番人気なジャンルですよ」

「そう、そこがポイントだよ」

　俺はベッドに上がる。そしてずり落ちたメガネを指で抑え、きらり瞳を輝かす。

「つまりだ、魔法少女モノって言うのは、俺が思うに一番現実、この世界から遠く最も清い存在と考える。いいか現実女どもはな、男なんて取っ替え引っ替え、落書きの上にペンキを塗るようなクソッタレな化粧に、ジャラジャラ意味のわからんアクセサリーに金を費やし、それでもって、男の事をすぐに馬鹿にするし、そのくせ一人じゃ何もできない。まあ男もそうだけどな。だがアニメ世界の少女は違う、可憐だ。美しい、余計な化粧もしないし、アクセサリーだってちゃんと調和が撮れていて本人を際立たせている。ちゃんと絵になっているんだ。絵だからな。それに加え、魔法少女ってのはな、その素晴らしい二次元少女に更に魔法というファンタジー要素をプラスアルファだ！まさに、少女の究極的理想像といえよう！憧れるのは当たり前だ！そしてそれは女に限らない男の俺だって憧れて何が悪い！魔法少女は二次元少女の中でもっとも美しい！俺は断言する！！」

　と、魔法少女がいかに素晴らしいかということを妖精に言ってやった。

「そうなのですか……。まあ、魔法少女ものなら選択科目でとってましたし、一応知り合いもいるので何とか潜り込めると思いますが、やっぱりやめておいたほうが」

「何故だ？」

「だって、男の人が女の子やってもあんまり感情移入できないと思います」

俺はおもむろに立ち上がり、クローゼットの扉を開ける。そして、奥に仕舞い込んだ団ンボール箱を引きずり脱して中を開けた。
トゥルルを手招きしてその古臭いビデオテープを見せつけた。タイトルは書いていない無地だ、よく見ると鉛筆で数字だけ書かれているのが分かる。
「見よ！このＶＨＳ！」
「何ですかこれ？」
「最近じゃほとんどお目にかからないビデオテープだ。ベータじゃないぞ、ＶＨＳだ」
「知ってます。中身を聞いているのです何も書いていませんよ？」
「あたりまえだ。書けるはずもなかろう」
そう言って、俺は立ちがあがり部屋をゆっくり歩きまわった。
ゆっくり息を吸う。そして思い出す。
「そう、あれは俺が小学校の一年生の頃。俺の妹（二歳年下）、湊がまだ幼稚園だったころだ。俺と妹が同時に熱を出して幼稚園を休んだ時だった。妹は、録画してあった日曜朝八時半放送の魔法少女アニメ「おジャ魔女どれみ」のビデオテープを見ていた。横で転がっていた俺もなにげに一緒に見てしまったのだ。俺は衝撃を受けた。なんと面白い事か。それ以来俺は妹共にそのアニメを一緒に見るようになった。録画していたテープはだれもいないときにこっそり観た。だが妹が小学校に上がると観なくなってしまった。それ以来俺はこっそり自分の部屋で録画して見ていたわけだ。ちなみ、俺の一番置石入りはおんぷちゃんだ。あの一見してクールな感じがいい。なかでも＃シリーズはいい。一番目立っているからな。オープニングの曲は声変わり前なら完璧に歌えた（魔女？）」
このすばらしい熱弁を聞いて、承知しないはずっはないと思った。だが、トゥルルは
「き、キモイです。ものすごく！」と言って、高速に後ろへ下がろとした！

俺はすかさずハエつかみを実行！
「逃げるなボケ！」
「だって！」
「うるさい！それ以上言うな！それ言ったらぶっ殺す！だからこれだけは絶対に秘密にしてきたんだ！」
「わ、わかりましたから離して下さい！つぶれるッおェッ！」
俺は手を緩めトゥルルを解放する。トゥルルはふわふわと頼りなく浮いた。

「じゃあ、とりあえず魔法少女モノの世界に言ってみますね。女の子でいいんですね」
「当たり前だ。男なんかなってどうするんだよ。何度も言わせるな」
「じゃあ、とりあえずクラスメイトくらいからはじめましょうか」
それを聞いて俺は直感的に、嫌な予感がした。何か、俺のアニメに対する直感がこれは否と告げている。俺は、とっさにトゥルルを掴んだ。
「何言ってんだお前。俺は魔法少女だろ？なんでクラスメイトなんだよ」
「魔法少女もので魔法少女はすなわち主人公もしくはそれに近しい存在を意味します。でも、いきなりそういう重要な役をやることはできません。まずはそれなりに存在感のある脇役を経験してもらいます。いきなり主人公もしくはそれに順する役をするのは無理です」
「何でだ？」
「そんなに決まってるじゃないですか、感情移入できないからです。この世界とのギャップがありますから、順応するには相当時間とエネルギーが必要ですから最低でも二、三十年くらいは経験してから……」
それを聞いて俺は怒り心頭。妖精を握る手を一気に強くする。
「冗談じゃねえ！そんなに待てるか！今すぐ主役にしろ！俺が主役

の魔法少女だ！」
「そんなの無理ですって！え、エネルギーがないとすぐに落ちてしまいます！」
「何だそれは？なんのエネルギーだ！ガソリンか？金か？それとも血か？」
「あなたがアニメと呼んでいるものに含まれるエネルギーですよ。心の純度のことです保つには必要なのです！」
「アニメナジーのことか！それなら俺は誰にも負けん！」
「む、無理ですって！」
「主役にしろ！魔法少女にしろ！じゃないと握りつぶすぞ！」
俺はその糞生意気で頑固で訳の分からん事を言うわがままクソ妖精を思いっきり顔に近づけて言う。
「言う事を聞かねえと、その綺麗な羽根引きちぎってやるぞ！地蟲になりたいか？ええ？」
「わ、わわあ。わ、わかりましたから、主役、魔法少女にします」
それを聞いて俺は一安心、可愛い妖精さんトゥルルをそっと机の上に置いてあげました。
だが……
「ちょっと待て！」糞生意気のボケ妖精はまたしても逃走を試みる。俺はすかさず、お徳用ＤＶＤの透明ケース（円柱）を手にとってそのクソッタレにかぶせ閉じ込める。
そして、机の本棚からラノベを数冊取って、ケースの上におもしとしておく。それから、殺虫剤を持ってきて
「これ以上、抵抗したらここから毒ガスを流しこむぞ地蟲！！」
「わっ、わわわわ！やめてアウシュビッツ！」
クソ妖精は泣き出す。だが俺は構わない。
「さっさと契約しろ！」
「助けて兄様！兄様！！」
「あと、五秒。四、三、二……」
「わわあああああ！わかりかりました！分かりましたから！！」

俺はケースの重石をどけて、妖精を解放する。妖精はゆっくり出てくる。俺の圧倒的なパワーに観念したようだ。もう逃げようとはしなかった。

「で、では、ガイドラインを作成しますのでちょっと待って下さい」

そういって、俺の素晴らしきパートナー、妖精君はうかに上がる半透明なパソコンのみたいなやつのキーボードを叩き始めた。

「あ、そうだ、こちらの口座に２５６３４５円を振り込んでおいてくださいね」

「は？」

「契約金ですよ」

「何だそれ！金とるのか、金要るんか！」

「当たり前ですよ。いろいろお金かかるんですよ準備には。明後日までに振り込んでいただかないと自動的にキャンセル扱いになります。その場合自動的に”非常に悪いの評価”がつきますので、その点予めご了承おねがいします」

「ネトオクか！」

まあ仕方がない、魔法少女になるためだ。金はなんとか用意しよう。

そうだ、親父のへそくりが確か書斎の引き出しに。

B—1

どうも、トゥルルです。わたしは、この世界ではない別の本当の世界から来た妖精なのですが、どうしてこの世界に来てしまったのかというと、実は、わたしには十歳年上の兄様がいて、その兄様が管理する世界で、お供をしていたのですが、歪（ひずみ）に巻き込まれ、この世界に飛ばされてきたのです。気がつくと暗いところにいました。あとで分かったのですが机の中だったらしいです。

　わたしたちのいる本当の世界とは、この世界では物語、つまり想像上の世界に当てはまります。ですが、それは事実ではありません。この世界の皆さんが、想像のだとか、空想だとか思っている世界こそ、実際、本当に存在しており、その中で起きたことも全て事実です。要は、その世界で起きたことが物語としてこの世界に配布されるわけです。

　古くは神話や伝承という形で好まれましたが、最近はライトノベルや漫画、特にアニメが人気です。

　なのでわかりやすく言えばわたしたちの世界はいわゆる「二次元セカイ」と考えていただいて差し支えありません。でも、本来こちらのほうが次元が上なので「二次元」という表現も正確ではありません。これだけははっきり認識しておいてくださいね。

　ちなみに、わたしたち守護妖精はそのたくさんの世界を管理する守護者なのです。

　さて、そんなわたしですが、世界の守護妖精として活躍するため、学校を出て要約資格を得ました。本来なら、もう少し修行してから来るつもりだったのですが、不幸なことにいきなり飛ばされてしまいました。

　こうなっては大変です。世界を守護する妖精として、パートナーを見つけ、契約しないと元の世界には戻れません。幸い、パートナーはすぐに見つかりました。石村高師くんという高校生くらいの男

の子です。メガネをかけていいます黒髪の少年です……

でも、とんでもない人でした。

「さっさと俺をアニメの世界に連れて行け！」

そればっかり言います。おかげでわたしの事情なんて一つも聞いてくれませんし、世界観の説明すら聞いてくれません。その上、いきなり魔法少女にしろなんて言います。無茶ですよ。絶対にすぐに破綻しますって。でも全然聞いてくれません。トゥルルは泣きたいです……

＊

「はい」そう言って、トゥルルはA５サイズの用紙を手渡した。そこにはへんてこりんな見たこともない文字でズラズラ文書が並んでいたがなんのこっちゃさっぱりだ。一番下に名前を書く欄とおぼしきスペースがある。俺は何も考えずそこへボールペンを走らせた。

「いいんでしょうか、わたし、こんな人と契約してしまって」

トゥルルがなんかため息混じりに独り言を言ってる。

「安心しろ。俺がパートナーになったからには最高の二次元を作ってやる」

「で、でもわたし出来るかどうか自信が……主人公をやるには新たに世界を作る必要があるのですよ。それにはしっかりとした設定と世界観を作らないといけません」

「そんなの当たり前だろ？　つか、お前の役はそれだろ？」

「ふ、普通はいきなり主人公をやったりしません。だから世界を新たに作る必要はないのですよ。他の妖精が作った世界に割り込んでしまえばいいのですから。わたしもそのつもりでしたし、第一わたしは世界を作ったことはまだないのです」

「ちょっと待て！てことはお前ぶっつけ本番で俺を変な世界に飛ばそうとしたのか！」

「だ、だから言ってるじゃないですか！　いきなり主役は無理だって！！」

トゥルルはまた掴まれると思ったのか頭を抱えた。逃げるのはもう無理だと悟っているらしい、せめてもの防御のつもりだろうか。
「ま、いっか。何とかなるだろ。俺も協力するし、そこは二人で力を合わせなんとかうまくやろうぜ！」
と、俺はとりあえずやさしく言っておいた。いくらに次元世界にいけるからと言っても、やはり不安は残る。それにこいつのサポートはどのみち必要なのだ。ならば、ここは脅しではなく、信頼関係の構築によって、いやうまく行けばこいつを完全に手の内に置いて、俺の思いのままの世界を作るのだ。俺はそういう打算で優しくて信頼のおけるパートナーという路線に変更することにした。なんとかと妖精は使い用ってか？
「ではまず、基本設定からやりますね」
トゥルルはまた星の付いたステッキを振るった。そして、半透明なパソコンらしき物体を呼び出して、何か操作を始めた。
壁に黒板っぽいスクリーンが現れる。俺が見るにちょうどいい大きさの画面になった。人間パートナーを組むことを前提に用意されてプログラムだろうか。その辺はこのへっぽこ妖精でもうまく扱えるように工夫されているらしい。俺は少し感心した。
「ここに設定となる情報を書いてゆくのですが、まず主人公の年齢から決めましょう」
「十四、中二。あ、めんどだ。それ貸せ」
「だ、ダメですよ、これは守護妖精だけしか触っちゃダメなんです！」
「ちっ！」
「もう、ちゃんと言う通りにしてくれないとわたしもサポートできませんよ」
「わかった、わかった。ちょっと待ってろ」
そう言って俺は机の引き出しからメモ用紙を取り出してボールペンを走らせる。
「まあ、こんなもんでどうかな？」

夢崎かな（１４）
元気いっぱいの中学二年生！
クラスでは人気者でラブレターもたくさんもらう美少女けれども、鈍感で本当はみんなのあこがれなのに、自分自身は平凡で自身がなく、
なにか変わりたいと思っている向上心と謙虚さを忘れない理想的な女の子
　ちょっとドジっ子。機械が苦手。趣味は料理にお菓子作り、そして歌と踊り。
将来の夢はアイドル！

「なんですかこれ……（気持ち悪い……）」
「なんか言ったか？設定だよ設定！お前、いちいち聞いてゆくつもりなのか面倒だろ？」
「ええと……、でも、あんまり本人と違うと──」
またなんか余計なことを言いそうだったので、俺は遮って言う
「俺が女だったら絶対こうだ！だからこれで行く！問題なし！」
「はい、はい。わかりましたよ（ホントにキモイわ、コイツ）」
トゥルルは渋々そのメモに記された情報を入力してゆく。それと連動して黒板っぽい画面にも表示されてゆく。

「そうだ！声はどうなる？」
「え、基本的に自分の声ですが」
「お前は馬鹿か！俺の声を聞いてから物言えよ！」
「は？素敵なお声だと思いますよ」
男としてはな。俺は一言言ってから、その作り笑顔で適当なお世辞を言ってる、妖精に対してきつく言ってやった。
「お前な！いくら魔法少女になってもこの声ならオカマだろ！キモイだろ！その時点で魔法少女じゃねえ！！ただのオカ魔法醜女だろ

！いいか、俺が中二のとき、声変わりをしてどれだけショックを受けたか教えてやる！アニソンのほとんどは女性ボーカルなんだ！なのにそれが全く歌えなくなったんだ！あの時は三日三晩泣き続けたんだぞ！お前！その気持ち分かるか！」
「え、でもたかしさんは男の子ですからどのみちオカマですよ」
「てめえもう一回握りつぶされたいのか」
「わ、わかりました。こ、声もちゃんと変えられますから」
「そうか、それじゃあ」
「あ、大丈夫ですよ。頭の中でイメージしてもらえればそのとおりになりますから」
「いや、ここは完璧に正確に反映してもらいたい」
「へ？」
「ＣＶ：花澤香菜とか」
「はい？」
「花澤香菜だよ花澤香菜」
「誰ですそれ？」
「お前は！アニメ世界の住人のくせにそんな事も知らんのか！声優だよ声優！この世で一番美しい声を持った声優だよボケ！後のことは自分で調べろボケ！」
「え、実際に存在する声優さんを使うのですか？イメージできれば使えますけど、ただ、そういうケースは習いませんでしたし」
　お前絶対劣等生だろ？っていってやりたい気分だったが、もういちいち突っ込むのが面倒になった。正直こいつのアホさ加減についてはどうでもいい。

「ちょっと待って」
　俺は音楽プレーヤーのなかから花澤香菜のボイスだけを集めたリストを再生。そして妖精に聞かせてやった。
「これはなんとまあ、本当にこの世界の人なんですか？」
「そうだろ？そうだろ？すばらしいだろ？この何ていうか、入道雲

のようにほんわかして、お澄ましのように澄み切った、ホットケーキのシロップのような甘いボイスは一度聞いたらやみつきだ。それだけでアニメ二十本に匹敵する癒し効果があるのだよ、トゥルル君」
「はあ、そうですか。まあデータベースによると、そういうケースもなくはないみたいですから、多分大丈夫でしょう。他にご希望は？」
「ＣＶ：花澤香菜。以上だ。後はお前に任せる（キリッ！）」
「そ、そうですか。では、プログラムを起動させますから、そうですね、そこのベッドにでも寝転がっていて下さい」
「ちょっと待て、そっちに言ったら、こっちの俺はどうなる？」
「居なくなりますよ。慣れないうちは戻ってきたときにちょっと意識が朦朧とすることがあるのでなるべく安全な場所のほうがいいのです」
「戻らないといけないのか？」
「え、戻らなくていいのですか？いきなりいなくなってしまったら家族とかお友達とか心配しません？普通そういうところ気にすると思いますけど」
「何度も言わせるな。消えれるんだったら今すぐ消えてやりたいよ」
「そ、そうですか、でもいきなりあっちの住人になるのは無理ですよ。エネルギーの関係もありますが、こちらの世界との整合性の関係上、いきなり消えるのも問題なのです」
「そうか。それなら仕方ないな。じゃあ頼む」
そう言って、俺はベッドに横たわり目をつむった。耳元で電子音みたいな音がする。トゥルルがあのパソコンみたいなやつを操作しているのだろうか。しばらくして俺の意識はなくなった。

B―2

―以下、妄想CV：花澤香菜でお楽しみ下さい―

『ゆ、ゆっくり目を開けて下さい』
この声は誰だ。幼い女の子の声だった。聞いたことがある。そうだ、あの妖精だ。確か名前はトゥルルだった。俺はゆっくりまぶたを開く。白い光が飛び込んでくる。眩しい。
ぼんやりとした視界に映るのは、白い天井だった。とても柔らかい光だった。こんな優しい光、今までに見たことがない。
俺は慌てて体を起こす。そうだ、ここはアニメの世界のはずだ。何がどうなっているのか確認しなければ。まず、自分のいる場所。ピンク色のシーツのベッドだった。枕元の棚には愛らしいぬいぐるみが何体か置かれていた。ベッドすぐ側の出窓にもだ。
部屋の壁も薄いピンク色、タンスと学習机があって、綺麗に整頓されている。それこそまさに、女の子の部屋だった。
『大丈夫ですか？』
声は頭の中に直接入ってくる。どこに居る？
「おい、お前どこ？ふぇッ！」
声が違っていた。ゆったり澄み切った癒しのボイスだった。俺の声ではないこれは間違いなく『花澤香菜』だ！
「あわわわッ」
俺は思わず、じゃなかった、わた、わたしは思わずはびっくりして尻餅をつく。メガネも床に落ちた。両手で口を防ぎけりりぬ。あれ、ちょっと待って俺、じゃなかったわた、し。
「おいここ本当に、魔法少女の世界なのか？」
『そうですよ』　妖精は姿を現さない、声だけが聞こえる
「ちょ、ちょっと待て」

俺、じゃなかった私は、ゆっくり床に手をついて立ち上がる。そして大きく行きを吸い吸い込んで言ってみる
「とぅ、トゥットゥルー♪」
『何ですか？』
「ちげーよボケ！」
なんか鬱陶しい変な声が聞こえたが無視。
俺、じゃなかったわたしはものすごく興奮しました。心のそこから、そこれこそ涙がでるくらいものすごく嬉しくて感動のあまりベッドへダイブ！
「い、言えた！花澤香菜だ！！」
「だあああ言えた！言えちゃったよぅ！！」
布団にくるまり簀巻き状態。
「他に何言おうかなええと、あれはどうだ、ええと、あれじゃない、それじゃない、ええとなんだっけ……、お、お姉たま。なんちゃって、てへへへッ」
おっと、声だけで盛り上がっている場合ではない。わ、わたしは部屋中を見渡す。衣装ダンスを発見。そして開けて、備え付けられた鏡を見た。
「これが、俺？」
そこに映ったのは、身長百五十センチ弱、予定通り十四歳くらいの、白いブラウスに赤いリボン、灰色のプリーツスカートという制服姿をして、大きな瞳に、肩の少し下くらいまで伸びた黒髪の、理想的な、とても可愛らしい二次元少女だった。
『そうですよ？お気に召しました？』
「ちょっと待て、なんで黒髪だボケ。普通魔法少女の主役はピンク色だろ」
俺はクルッと踵を返して、落ちたメガネを拾い上げる
「しかも何だこのメガネ。必要ねえだろ？俺はほむらかボケ」
『だってその辺の設定考えるの面倒だったんですもん。だからたかしさんをそのまま使いました』

それを聞いた瞬間妖精トゥルルを握りつぶしてやりたい衝動に駆られた。
だがクソ妖精の姿がどこにも無いのだ。
「髪の色変えろ！ボケ！」
『む、無理ですよ。基本設定の変更には』と、言ったところ突然真っ暗になった。

気がつくとベッドの上だ。ただし、そこは散らかった元の俺の部屋のベッドだった。
「どういうことだ！ボケナス妖精！」
「ダメですよ、ちゃんと感情移入しないと、こっちに戻ってきてしまいます。自分で世界観を破壊してどうするんですか！」
「そういうこと早く言えよ！」
「説明途中で遮って勝手に突っ走ったのは誰ですか」
ちっ、俺は舌打ちする。だが髪色は絶対に譲れない。だからもう一回言ってやる。
「とにかく、髪の色は絶対だ」
「あとで設定変更すると物凄いエネルギーが必要です。世界を作ったばかりでそんな事をしたらものすごい時間がかかりますよ。多分三年ぐらい。それと五百万くらいかかります」
「役に立たねえなこのクソ妖精！（つか、また金！）」
俺はベッドにあぐらを書いて考えた。黒髪か。いやまて妥協は良くない。やっぱりここは、と思い立って、立ち上がり机の上に置かれた殺虫剤を手に取る。
「わ、待って下さい！こればかりはしょうがないのです！元々たかしさんは主人公になれる器、じゃなかった、だけのエネルギーが足りないのですから、ああそうだ。設定を追加する分には問題ありません。変身後に変わるってことでどうでしょう？」
まあ仕方がない。それくらいの妥協なら許してやらんこともない。

それにこんなやり取りをグダグダやっていても仕方ないしな。そう思って俺は再びベッドに横たわり、もう一回連れて行けと言った。
「変身後？まあそれならいいか……。あ、そうそう、あっちでお前って現れないのか？魔法少女もの何だから妖精がいたっておかしくないだろ？」
「え、いいのですか？」
「いいも何も、パートナーなんだから側にいてくれねえと困るだろ」
「た、たかしさん！わ、わたし今まで誤解していました！とっても嬉しいです！ありがとうございます！ではお供させて頂きます！」

＊

こうして、わたしも、たかしさんと一緒に魔法少女世界に行くことになりました。
たかしさんは思ったより良い人かもしれません。パートナーさんと一緒に世界に入るパターンは珍しいと聞きますから。

＊

またベッドの上だった。トゥルルによると、慣れれば自由に場所な場所に来れるらしい。　今度は勢い良く飛び起きた。体操の選手みたいなポーズで床に着地。
「それでさ、聞くけど、お前なんでここに居るわけ？」
当たり前のように浮いている妖精に向けて冷たい視線を飛ばして言ってやった。
「え、だってたかしさん言ったじゃないですか一緒に来てほしいって」
「お前はアホか！俺は未だ魔法少女じゃねえだよ！いきなりお前みたいな摩訶不思議な存在が出てきたらおかしいだろ！ボケ！」
「え、そんな事言っても？どうやって魔法少女にしたらいいのか？」
「は？何いってんだよお前！」
と、言ったところでまたしても元の世界へ。

「テメー！やる気あんのかボケ！」
「あ、ありますよ！ちょっとした手違いじゃなですか！」
「ふざけんな！ちゃんとこれじゃ世界観も設定もお前が壊してんじゃねえかボケ！」
「そんなこと言ったたって、わたし、わたし初めてなんだもん」
トゥルはメソメソと泣き出した。正直ここまでグズだとは思わなかった。、こんなバカ妖精一人に任せていたらいつまでたっても魔法少女になれない。しょうがない、手伝ってやるか。
「いいかよく聞け。導入はこういう感じだ」
「はい」
「まず、何気ない日常→危機的状況→そこへお前が登場→そんで契約たらななんたら適当な理由をつけて俺を魔法少女にする」
という、大まかなストーリをこいつに教えてやった。使い古されたパターンだけど、まあいいだろう。俺はもう一度ベッドに横たわった。トゥルは言われたとおりにパソコンに入力しただろうか。
また視界が落ちる。そして、目を瞼を再び開けると。

「ふあっ！」
けたたましく鳴り響く目覚まし時計に、俺じゃなかった。わたしは目を覚まし、ベッドを飛び起きた。
「た、大変遅刻！」
『き、キモッ』
「うるさいわボケ！」
わ、わたしは急いでパジャマのボタンを外し……
外そうとしたけど……。ちょっとまて、この下って……
「なあ、おい。このシーンって……もしかして着替えないといけない？」
『は？当たり前じゃないですか。というか、あんまり私に話しかけ

ないほうがいいと思いますよまだ登場していないはずなんですから』
「あ、そうか」
俺、じゃなかったわたしは恐る恐るそこにある膨らみを触ってみる。柔らかい感触が。今まで経験したことのない……未知の感触。女の子だ。女の子だもんな。あるよな当然。てか、俺、初めて触った女の子の胸が自分のだったって。あっといけねえ。感情移入、感情移入。

部屋の壁に吊るさた制服を取る。春なのか？ブレザーと長袖のシャツとベストとプリーツスカートがあった。と、とりあえずスカートを履く。パジャマの上から。それでズボンを脱いだ。スースーする。女ってよくこんなの履いているな。
続いて上だ。あれちょっとまて、ブラってするのか？するよな。中学生だもんな。どこだ、ええと、そうかこのタンスか。開けてみると、そこにはジュニア用のブラジャーが。
とっても気まずい、やりにくい。てかどうやってつけるんだよこれ。
エイッ！適当にやってみたらなんかうまく行った。目をつむったまま一気にやった。
そうか俺、女の子だもんな。これくらい分かるわな。ちょっと締め付けられるような感じがする。後はシャツとベストとブレザーを着ればＯＫだ。
「うわ、もうこんな時間！」
んー、なんかやりにくい。そんな事を言いながら、廊下を駆け抜け、ってあれこれ俺の家ほとんど同じ間取りじゃん。あの糞妖精！また手を抜きやがったなあ。と、いけねえ、階段を飛び降りてリビングへ。
机の上に置かれていたのは、トースト一枚。そしてその隣には「ごめんなさい。お母さん役のキャラさんは今兄様にお願いしています。最終回が終わったらこっちに来てくれるってことなので安心

して下さいね。なので今回は登場なしです。適当にパンを加えて登校して下さい」

との置き手紙が。あのクソ妖精！置き手紙するんなせめてもう少し世界観に合った理由を考えとけよ。仕事で朝早いからとか。

仕方がない、とにかく俺はそれを口に加えてって、滑った。落ちた！こんなの口に食えながら走れるかボケ！もういい朝飯は無しだーとにかく走る！走って元感へＧＯ！

―というわけで、ここらでお決まりのナレーションを入れてみましょう―

わたしの名前は夢崎かな。元気いっぱいの中学2年生。趣味は料理にお菓子作り、そして歌と踊り。将来の夢はアイドル！得意科目後は家庭科と国語と音楽、数学と理科、あと機械はちょっぴり苦手でドジっ子だけど、クラスメイトにはそれなりに頼られる、委員長だったりするよ☆

という感じで、住宅街を駆け抜けて、商店街を通りぬけ、大通りへ。

まあこの辺はベダだけどまあいけるかな。なんて思いながら、細い脇道へ。ここを曲がれば学校だ。

するとそこへ、何かがぶつかった。

ゴファッ！

瞬間に上げた声はこんなだった。ぶつかったのは転校生ではない。もちろんパンチラ、キャッ！のシーンでもない。トラックに吹っ飛ばされたのだ。

俺、じゃない、わたしの体は宙を舞う。放物線を描いって数メートル飛ばされてゆく。　そして地面にぶつかる。アスファルトが全身を打つ。視界がぼやける。黒いアスファルトがみるみる赤く染まる。次第に意識が遠のく。

あれ、あれれ……死んじゃうの……わたし……

「って、オイ！どういうことだこれ！！」
また元の世界に戻っていた。俺はベッドを思いっきり叩きつけた。
「え、何かまずかったですか？」
「なんで俺殺されかけてんだボケ！」
「え、言われたとおり危機的状況をやったんじゃありませんか」
「ちげーよ！危機的状況ってのは、こんなのじゃなくて！」
いちいち説明するのがバカらしくなった。というか、俺はこいつを甘く見ていたのかもしれない。もしかすると、とんでもなくロクでもないやつかもしれない。
なので一応聞いてみる。
「つかお前、この後どうするつもりだったんだよ」
「ええとですね。まず、事故に遭うでしょ。それで救急車で運ばれて十二時間にも及ぶ手術の末、なんとか一命を取りとめます。でもたかしさんは全身不随になります。そして、ベッドの上で退屈な毎日を送ります。次第誰もお見舞いに来なくなり、一人ぼっちになりそれで毎日、死にたいと願うのです。そこへ私が登場『元の体にしてあげるからわたしと契約して魔法少女になってよ?』って感じで現れて、魔法少女になります」
「どんだけ鬱設定だボケ！つか、パクリ入ってんだろそれ！パクってどうする！それにそっちの俺は『たかし』じゃなくて『かな』だろ」
「どうでもいい事を」
「とにかくこんなのは却下だ。全く、お前が世界観ぶっ壊してめちゃくちゃにしてどうする。そうだ、おまえなんか適当に襲われてろ。そこに俺がたまたま出くわしてお前を助ける。それで魔法少女だ。いいな」
「いやですよそんなの。痛いのとか、怖いのとか」
「俺にはトラックではねさせておいてお前何言ってんだボケ！」
「嫌です！絶対いや！」

駄々をこねるだした。うぜーコイツ！マジで引きちぎってやりたい。
「仕方がない。魔法少女になるシーンは後回し、これはご法度だけど回想シーンを使う。魔法少女になる経緯は後でやる。だからお前のっけから俺についてろ」
「ダメですよ。さっきのシーンもう正式に記録しちゃってますから訂正はできません」
「そうなのか？一回やったらもうやり直しできないのか」
「そうですよ。一回起きたことはもうその世界では事実として記録されてしまいます」
「そういうことは先に言えよ！！何度も言わせるな！！」
俺は少し考える。全身不随で魔法少女なんて欝展開どう考えても駄目だ。クソすぎる。設定として成り立っていないだろう。第二、第三の魔法少女ならいざしらず、主人公がそれって、こいつどんなセンスしてんだ。ていうか、魔法少女を選択していたって言ってたの本当か？本当だとしたらこいつは間違いなく劣等生だ。
「仕方がない、これも本来ご法度だが」
「なんですか？」
「夢オチ。夢だったことにしてしまえ。目覚めのシーンからやり直しだ」
「なるほど、そう手がありましたか」
何感心してんだか全く。俺はまたベッドに転がった。そして目をつむった。今度こそうまく行ってくれよー！
「うわっ！」
俺、じゃない、わたしは飛び起きる。よかった夢だった。夢オチという事にしたからな。
「た、たかしさん、もうこんな時間です！急がないと遅刻します！」

「たかしじゃねえよ！ボケ！かなだろ！！」
「あ、すいません」
やる気あるのこいつ。まぁいい、続き続き。
わたしの名前は夢崎かな。元気いっぱいの中学2年生。趣味は料理にお菓子作り、そして歌と踊り将来の夢はアイドル！　得意科目後は家庭科と国語と音楽、数学と理科、後機械がちょっぴり苦手なドジっ子だけど、クラスメイトにはそれなりに頼られる、委員長だったりするよ☆
で、この子は妖精トゥルル。わたしのパートナーなんだけど、実はわたし、魔法少女だったりするの。あ、この事はみんなには秘密だからね。
という感じで、家を出て、パンを加えながら、住宅街を駆け抜けて、商店街を通りぬけ、大通りへ。トゥルルはわたしの隣をくっついて飛んでくる。ちなみに、わたし以外の人には見えないから大丈夫だよ。

うん、今度はうまくいったから。なんて思いながら細い脇道へ。ここを曲がれば学校だ。
私立美洲原学園中等部2年A組が俺、じゃないわたしのクラスらしい。

「あのさ、トゥルル。変身ってどうやってやるんだっけ？もう一回教えて」
魔法少女のなり方を聞いていないのに既に魔法少女担っているという設定にしてしまっている。またしてもこいつのミスだ。だから仕方がない話に合う形で聞くことにした。
「え、そりゃあ……」
なんか考え込んでいるぞこいつ。
「あ、いけない遅刻だ。あとで！」
そう言って、俺は、わたしは、校舎へ。

上履きにはきかえて、階段を登りそしていざ教室へ。扉を開けて「おっはよーッ！」と言ったところで、視界がドゥルルルルルルルルルルウ！！！

なんだこれは？オイどうなっている？視界というか、画面というか、セカイが揺れている。まるでゲームの途中でカセットを無理やり引きぬいたファミコンみたいに世界がフリーズしてやがる！

「お、おお、オイ！どうなっている？」

「あわわ、わわわわわ」

トゥルルも驚いているようだ。

そんな事をしていたら、また戻っていた。

B－3

「今のはなんだ？」
　俺はベッドから体を起こして、立ち上がる。
「ええと、このあと扉を開けて、自分の席に行く。それで親友二人と挨拶を交わすってことになっているのですが」
「なんで止まった？」
「ちょっと待って下さいね」
　トゥルルは星のついたステッキを振ってPCみたいなたやつを出し、キーボードを叩く。
「バグが発生してますね。どういうことでしょう？」
「こっちが聞きてえよ」
「あ、わかりした。ダメですよたかしさん。ちゃんと友達をイメージしないと、たかしさんにあった友達のキャラさんが来るように設定してあるんですから」
「はあ？なんだそれ？」
「脇役のキャラは自動的に集まるようにしてあるんです。だから、明確に友達をイメージしないとキャラさんが集まりません。だから破綻してしまったのです」
　俺は考える。友達。「かな」の親友的な存在二人。どんなやつだろうか？イメージしてみる。あれか……
「駄目だ！イメージが出てこない！」
「えっ？」
「小学校高学年から友達なんてずっと居ねーよ！アニメばっかり見ていたからな！友達なんて面倒なだけで鬱陶しから作らなかった。友達がなんなのか解らねええ！！」
「そ、そんな！どうするんですか！」
「し、仕方がないお前の友達でいい、そいつの性格とか何でもいい教えろ」

「え、えええ。あの、わたし……ずっと体弱くて……いじめられてたし……、その、お兄様とばかり遊んでいたから」
「お前もぼっちなのかよ！ボケナス！」
トゥルルはしゅんとなって涙目。俺は頭を抱えた。心底ダメ妖精だ。
「駄目だ！ぼっちの魔法少女なんてナンセンス過ぎる！ボケ！何とかしやがれ！」
「仕方ないでしょ！友達居ないたかしさんが悪いんじゃないですか！」
「うるせえ！居ないんじゃねえよ。ワザと作らなかったんだ！」
「居ないことには変わりないです！」
「お前も人の事言えるか！」
と、そんな事言っても仕方がない。落ち着け俺、ここは冷静に冷静に。
「仕方がないな。もうめんどうだからいきなり魔法少女の戦闘シーンをやろう」
「え？また夢オチ」
「今、春休みな。そんで俺は転校してきたの。春休み明けにあの学校に行くことにしよう。で、その前に俺は魔法少女になって、戦うの」
「わかりました。そうしましょう」
「あ、ありますよ」
「つかお前さ。一応確認しておくけど、ちゃんとやる気ある？」
「じゃあ確認するけど、変身後の姿はどんなだ。それも俺のイメージ任せってわけか？ちゃんと設定してあるんだろうな。魔法少女になるプロセスとか魔法の属性とか、服とか」
「あ、あわわわ。ええと……、え、只今。少々お待ちを」
ほらやっぱり。いき当たりばったりなのは俺じゃなくてこいつじゃねえか。とんでもなく初心者だな。全く、他に同じような守護妖

精ってのが居るらしいが、みんなこいつみたいなのだろうか。だとしたら選ばれたヤツは悲惨だな。まあ俺くらいアニメに情熱があるやつじゃないと務まらないわな。
　トゥルルはいつまでたってもキーボードを叩くのをやめない。と言うか、何か書いては消し、書いては消しを繰り返しっているっぽい。殺虫剤が必要なようだ。
「オイ！」
「わ、わわわそれだけは！」
　顔面蒼白で本気で慌ててやがる。こりゃ末期だな。さすがの俺も戦意を喪失だ。

　しょうがねえ。俺はメモ用紙を取り出して、机に向かう。と、ちょっとまてよ。魔法少女のドレスってどんなだ？ええと、と俺は昔見た数々の魔法少女もののアニメを思い出す。
「ええと、こんな感じかな」
　適当にシャーペンを走らせてみた。トゥルルが俺の肩の上から覗く。
「へ、下手ですね」
　そういう言われ、俺はブチギレ！紙を丸めてポイ！糞妖精におもいっきりぶつけてやる。
「お前がポンコツだからいけねえんだろ！俺、美術は大ッキライなんだよ！友達の顔を描きましょうとかふざけた課題、毎回毎回出しやがって！友達が居ない奴のこと少しは考えろ！そういう時に限って無理やり組まされたやつが最悪タチの悪い奴で思いっきりクソ似てねえ下手くそな絵を描きやがって、それで点数稼ぎやがるんだ！それが許せないから俺はある時から美術の授業には一切参加していない！だから絵なんか描けやしねえ！」
「だ、大丈夫ですよ、ほらイメージしてもらえれば」
「お前はアホか！見たこともないものをどうやってイメージするんだ！さっきの友達のシーンの事忘れたのか」

それからおよそ四時間。時刻は夕食時七時十分前
「できた！どうだ！」
机の周りにはなんまいものＡ４　コピー用紙が散らばっていた。
まるで売れない漫画家が何枚も書き直したみたいに。
「おお、なんとまあ」
トゥルルも驚いていた。いや、一番驚いたのは俺だ。最初とは比べ物にならない程上達していたのだ。考えみればアニメばっかみていたのだ頭の中にアニメ絵のイメージは無数にあるのだ、要はそれを出力してやればいい。少し練習すれば絵なんて描けて当たり前だ。
「しかし、俺にこんな才能があったとはな」
「すごいです、こんなに短時間でこんなに上達するなんて」
「だろ？いやしかし、糞世（ヘギュヴァ）ってのは恐ろしいな」
「え、何がです？」
「いや、だから、これだけ描けるってことは元々かけたんだよ。なのにさ、美術のセンコーが嫌いっだけで絵を拒絶してたんだから、要は糞世（ヘギュヴァ）の糞教師の悪影響で俺の能力を封られていたってことだろ？」
「そうですね。まあそれが糞世（ヘギュヴァ）なんですけどね。何をやってもうまくいかないようになっていますから。特にたかしさんみたいな人は」
どういう意味だ。このやろう！と突っ込んでやってから俺はまたまたベッドに横たわる。　何回目だ？今日。

だがしかし、「高師！ごはんよー！」と一回から呼ぶ声が。
「今忙しい後にしてくれ！」俺部屋の戸を開けてからそう叫んだ。
「じゃあ、あんたも分はナシね！」
と、カーチャンが言うのだ。それに……腹のあたりをさすってみるとかなり凹んでいた。寝てただけのはずなのに。ああそうか、そういや昼に目玉焼き食っただけだったなあ。
「腹が減っては戦ができぬ、だ。トゥルル。飯食ってくるわ」

持に必要なことはやらないといけないらしい。

「は、はい分かりました」

そう言って俺はリビングへゆく。まあ正直飯なんてどうでもよかったが、トゥルルが言うにはこっちに体を置いている以上、体の維持に必要なことはやらないといけないらしい。

「なんだそのだらしない格好は」

リビングに入るなりいきなり怒鳴られた。怒鳴ったのは俺の親父石村武人（５１）

ところどころ白髪が混じったオールバックの髪に、銀縁の大きなメガネをかけた中年のおっさんだ。スーツを着ているままだ。さっき帰ってきたばかりだろう。

俺はこの親父が大嫌いだ。なぜなら俺のことを完璧に否定するからだ。

俺は無言で親父の斜め向かいに座る。今晩の飯は煮物と味噌汁と焼き魚だった。こんなんだったら部屋でカップ麺を食ってたほうがましだった。なんでよりにもよって今日に限って帰ってくるんだよボケ。

「はい、どうぞ」と、カーチャンが味噌汁を持ってきた。カーチャンは石村幸恵（４４）だ。味噌汁というより昨日の残り物をぶち込んだ豚汁見たな具だくさんなやつだった。

短めの茶色がかかった白髪染めの髪に、ちょっと太ったおばさん体型という典型的な主婦だが親父とは違いまだ若さが残る。近くのスーパーでパートをしている。

「湊（みなと）はどうした？」

「塾ですよ。夏休み明けの宿題テスト対策ですって」

「そうか」

会話はそれだけだった。三人は黙々と食事を口に運ぶ。聞こえてくるのはテレビの音と、味噌汁をすすする音くらいのものだ。いつもこんな感じだ。多分、親父とカーチャンの間も冷え切っている。こ

こに妹がいれば更に空気が悪くなるのだが。

「ところでお前、学校はどうした。今日は休みじゃないだろう」

やっぱりきた。絶対来ると思った。

「高師（たかし）。あんたの言い分は分からなくはないけど、学校はやっぱり行っときなさい」

「問題ない。そのための高認です」俺はメガネを中指で押さえ、短く答えた。

「そういう問題じゃない！高校中退なんてみっともないだろ！仮にだ、お前が大学に進学したとしても、高校を中退したという事実は残るんだぞ！そのなんだかしらない試験を取ったからって世間は評価してくれるわけじゃない。むしろ高校を途中でやめた中途半端もんだって評価を下されるのが落ちだ。そうなったら就職にも響く」

これだ。また始まった。最近ずっとこんな感じだ。

事の発端はそう、俺が高卒認定を一発出合格した去年の秋。それからしばらくは大人しくしておいた。学校も出席日数最低限だけいって一年次はなんとか終えている。だが、二年に入ってからだ。俺は学校を辞めたいと親父に言った。高卒認定を持っていれば問題ないと考えたのだが、親父には通用しなかった。俺は単にアニメを観る時間が欲しかっただけなのだが、それだとこの糞親父は納得しない。だから難関大受験を口実にした。

しかし、親父は納得しなかった。

俺は黙って飯を口へ運ぶ。このクソ親父、人の話を聞かないのだ。何を言っても無駄だ。

「いいかよく聞け！社会に出たらな人付き合いできない奴はダメなやつなんだ。お前みたいに引きこもってアニメばかり見てる奴がどうして人付き合い出来る？コミュニケーション出来る？飲み会いって話出来るか？ええ？社会人になったらな、そういう付き合いは嫌でもしなきゃならない。出来ないは置いてきぼりにされる。話の輪に入れないんだよ。仕事ってのはな、人付き合いが肝心なんだ。話の輪にも入れてもらえない奴がどうして仕事できる？そんな奴は社

会人としてやっていけない。お前は既にそうなりかかっているんだ！そんな事では立派な社会人にはなれないぞ！」
「はっ、なりたかねえよそんなもの。ああもういい。俺、就職なんてする気ねえし、だから進学もしねえ、学校も必要ねえ！文句あるか！何が社会人だ。何が人付き合いだ。そんなくだらんものに割いている時間はミジンコ程もないんだ！そんな事をしている暇があるんなら一本でも多くアニメを観る！」
「お前な！自分が何を言っているのか解っているのか！」
「ちょっとあなた！」
「お前は黙ってろ！こいつは本当にダメ人間だ！」
「ダメ人間で結構！立派な社会人なんてなりたかねえ！そんなくだらなええ事のためにアニメを犠牲にするくらいなら死んだほうがマシだ！」
「俺はアニメを見せるためにお前を養っているわけじゃない！」
「俺はアニメを観るためだけに生きているんだ！文句あるんなら今すぐ殺せ！」
親父が真っ赤になって殴りかかる。カーチャンが親父を羽交い絞めにして静止する。俺はその隙にリビングを出る。
「出て行け！お前みたいなクズは家にはいらない！」
「やなこった！出て言ったらアニメ見れねえじゃん！」
俺は扉を勢い良く締めて、階段を駆け上がり自分の部屋へ。カーチャンが後から追ってきた。扉の鍵を閉める。カーチャンは扉の戸を叩いて叫ぶ
「高師！」
「うるせえ！もう話かけんな！明日から飯もいらねえ、俺はこの部屋から出ねえから、一切邪魔すんな！」
「ちょっと高師！」
「うせろババア！邪魔をするな！」それだけ言ったらカーチャンもおとなしくなった。
ちょっと言い過ぎたか。いや、これくらいって置かないと俺の気

持ちは伝わらない。
　俺にとってアニメは命よりも大切なモノなのだ。それを犠牲にすることは絶対に許されない。それを否定する親父もだ。何が社会人だ。くだらねえ。

「さ、トゥルル。邪魔者はすべて駆逐した。行くぞ」
「あの、いいのですか？」
「何だ見てたのか」
　気にするな。俺は一言だけ言って、ベッドに横たわり目をつむった。横でまたキーボードをタイプする音がなる。けれども……
「おい、いつまでやってんだ」
　横目でトゥルルを見ると、何故か慌てている。
「あ、いえ……。た、大変です！たしかしさんの純度が下がっています！このままではエネルギー不足であちらに行けません！たかしさんが、こっちの世界のことばかりを考えているからです！」
「なんだと？」
　そんなはずはない。俺にとってこんな糞ったれな世界どうでもいい。そのために親とまで喧嘩したんだぞ！
「さっきことがストレスとなって、たかしさんの心の純度が下がったんですよ」
「なに？俺の心が汚れたのか？」
「そうです」
　なるほど、そういうことか。それはまずい。どうしよう？親父と和解でもしなきゃいけないのか。いや待てよ、違うぞ。そうだ、この世界はクソッタレな仮の世界のはずだ。こんな糞世にとらわれる必要はない。そうか、そうだ。だったら汚れた心は癒せばいい。
「トゥルル、ちょっと中止だ。俺は今からアニメを観る！糞世（ヘギュヴァ）のトラブルで俺の心に傷がついたんだ。それを癒すにはアニメ以外にない。アニメナジーの補給だ！」

と言ったところで思い出した。そうだＤＶＤプレーヤ壊れてやがったんだ。俺は恐る恐るテレビとプレーヤーのスイッチを入れてみた。
あれ？ついたぞ。ＤＶＤも問題なかった。俺はホッとひと安心。
そしてＤＶＤを再生。
「お前も観るか？」
「え、ええ」
「なら最初からだ」
俺は一話目からもう一度見なおすことにした。このアニメ世界から来たくせに、アニメのことが全くわかっていないクソ妖精にアニメとは何かを教えるために。
「あ、これ兄様のお友達の……」
「しゃべるなボケ！」

そんなこんなで、明け方五時をまわったあたり。
「さあ、アニメナジーは十分の補給した。いくぞトゥルル！」
て、寝てるし。つくづくダメ妖精だ……学ぶ姿勢が微塵もない。

—という訳でやっと始まります本編—

1

目を覚ます。今回は最初から制服を着ておいた。着替えシーンはやっぱり苦手だ……

「じゃあ行くぞ！って、あれ？トゥルル？どこ言ったクソ妖精！」

俺は、じゃない、わたしは部屋中を見渡した。けど、あの糞役立たずな妖精はどこにもいない。いや、居ました。ベッドの布団の中でぐうすか寝てやがる。

「オイ！」

わたしはそう言って、そいつをつまんで壁へ思いっきりぶつけてやりました。

「うぎゃ！」壁に激突して、トゥルルは床に落ちる。

「何するんですか！」

「何じゃねえよてめえ！やっとこっちに来たってのになんだ？ぐうすか寝やがって、お前ホントにやる気あんだろうな？」

「あわわ、ごめんなさい」

正座を崩した格好で両手をついて謝っているトゥルル。まあいい今回は許してやらんこともないか。

「さあ、行くぞ！」

という訳で、わたしたちはとある住宅街にやってきた。つか、なんで春休みなのに制服？

「じゃ、やるぞ。できるかな？」

「だ、大丈夫ですよ！昨日教えた通りやればちゃんと出来ます」

と、トゥルルはそういうのだが、もちろん昨日教えてもらったなんて事実は存在しない。実際はこれが初めてなのだ。緊張する。

「い、行くぞ。ななれるかな、魔法少女……」

わたしはハートのついたシャープペンくらいのステッキをで大き

な輪を描いた。
　半円を描いた所で思った。
「なあ、もう少しこれマシなのないのか？　なんかこれ、ものすごくダサくない？」
「何言ってるんですか、それはわたしたちが使っている本物の魔法ステッキなんですよ！」
「そ、そう」
　まあいいか、デザインは後で考えよう。
　基を撮り直してステッキを振るう。一周、大きな円を描いて……
「ゲホッ！ゲホッ！」
　煙がモクモク。視界が真っ白！
「おい、なんだこれ！オイ！」
　煙が晴れて、ようやく視界が戻る。ゆっくり目を開けるとピンクを基調としたフリルとギャザーとリボンがいっぱい付いた。俺がデザインした魔法少女のドレスに変わっていた。
「か、鏡！」
「あそこにありますよ」
　向かいにあった道路の反射鏡に近づいて、わ、わたしはそこに映った自分を確認する。
　一応、変身は出来ているみたいだった。髪の色もピンクに変わっていた。腕を上げ下げしてき心地というか具合を確認する。スカートはやっぱり履きなれない。スースーして気持ちが悪い。足と足がくっついて肌の暖かさを感じるのがなんとも言えない。
「う、うまく言ったか……にしても、なんださっきの変身シーンは」
「ええと、まあ最初はそんなもんですよ」
　適当にごまかされた。こいつ絶対何も考えていない。
「まあいいわ。お前にしては上出来だし」
「あ、ありがとうございます」
「なあこれ、帽子あったほうがいいかな？リボンも付けたほうが可

愛くね？」
「は、はぁ……（また気持ち悪いことを）」
塀に隠れるようにして住宅街の先を覗くのだが。
「なあ、ほんとにここに現れるんだろうな？」
かれこれ十数分ここに居るのだが、何も現れない。
「多分、この当たりです。反応がありますから」
そう言って、トゥルルは浮かび上がる小さなモニターを確認していた。小さすぎて正直わたしにはなにがなんだかさっぱりだわ。
ヒューと、春の風の冷たい風が吹く。糞世（ヘギュヴァ）ではまだ残暑残る九月だってのに、こっちは春休みだからものすごく寒いのだ。おまけに履きなれないスカートで足が冷え冷えだ。
「さ、さぶい」
「大丈夫ですか？たかしさん」
「かなだ！」
「あ、ごめんなさい」
マジにやる気ないなコイツ。本当にクズだ。
ということで一時間近く、わたしたちはこの場所に居ました。
「テメー！いい加減にしろ！もう一時間になるぞ！」
寒いし、こんなコスプレみたいな格好で、幸い誰も居なかったけど、ずっと待たされていい加減に頭に来た。俺、じゃないわたしは、鬼のご形相で糞妖精に詰め寄る。
「ま、待って下さい！もうすぐですよ！」
「さっきから同じ事ばっか言ってんじゃん！ボケ妖精！」
そう言って、俺はクズ妖精に掴みかかる！
「ドバッ！」
俺は突然地面に激突した。顔面から。
「何しやがるこら！」
地面に両手をついて上半身だけ起こし、糞妖精に叫んでやる。ちょっと涙目だ。
「ち、違いますよ。わたしじゃありません！」

俺は立ち上がろうとした。けど、またすぐに倒れた。足元を何かが引っ張っている。
あわてて確認すると……
「何？あれ？」
「ひ、歪（ひずみ）です！来ました！」
「おい、オイオイ！何とかしろよクソ妖精！」
トゥルルは物凄い慌てていた。ステッキを左右に振って何かをだそうとしているが、出てきくるのはツナ缶やら米粒やら冷凍うどんやらで料理でもする気かボケ！
「えいッ！」
と、トゥルルがなにか投げた。足元に転がるそれを見て俺は絶句。手榴弾じゃねえか！
慌てて俺は足にまといついた黒いヤツを払いのけ、そして逃げる。閑静な住宅が、ゲリラのテロ地帯に一変。塀も粉々に飛び散って、自販機が横転。
「何やってんだ！お前！殺す気か！」
「そんなことより、たかし、じゃあいかなちゃん！前、前！」
そこにはナント！さっきより大きな黒い水たまりのようなものが道路の真中に。それみるみるうちに盛り上がって、ヘドロ人形みたいになりやがった。目だけが光っている。
「な、なななんだよこれ！」
「気をつけてください。あれに飲み込まれたらこの世界にはいられなくなります」
「だから、あれがなんなのか聞いてんだよ！あれをやっつければいいのか」
「はい、あれは歪（ひずみ）です！」
言ったところで、そいつは黒い液体を飛ばしてきた。俺、わたしは間一髪回避。トゥルルもなんとか避ける。
「歪は糞世（ヘギユヴァ）に落ちた人の鬱憤やストレスがこの世界に現れて、それで世界を蝕んでゆくんです。飲み込まれたら二度と戻れません！」

「なんだって！なんでそんなものがあるんだ！」
黒い攻撃を避けながら俺は叫ぶ
「実は、わたしたちが世界を作るのは歪の退治という目的もあるのです！敵キャラとして登場させそれを退治することで世界を守る役目を帯びているのです！」
「だから、そういうことは早く言えっての！」
道のあちこちに飛びっちた黒い液体はウニョウニョうと動き出した。
「ま、まさかあれから新しい敵が出くるとか？」
嫌な予感はまさしく的中。小さい水たまりは盛り上がって、そして……
「おい、何だあれ」
間抜けな口を開いて、間抜けな目をして、間抜けな尻尾をして、そしてだらんと寝そべっている。ボディ全体は真っ黒だ。しかし形だけ見ればそれは……、某ゲーム、ポ〇モンのヤ〇ンみたいだった。
「おい、なんでここにヤ〇ンが現れるんだボケ！」
「わたしたち妖精は歪にある体で干渉して形を変化させる事ができるんですよ。世界観に合うように。だから、たかしさんに言われたとおり調べましたら、声優の花澤香菜さんはヤ〇ンを無限回収していたとかで、入れてみたらいいかなって」
「変なところに、中途半端な声優ネタ入れるなボケ！！」
と、二人訳のわからない会話をしていると
「うふふふっ！」と不気味な笑い声が。声の主は最初のでかいやつだ。喋れるのかコイツ。「お前何者だ！」
俺は本体に向けて叫んだ。
「私の名はブラックハーケン！この腐った世界を滅ぼしてやる！壊しってやる！」
一応会話はできるんだな。てか、なんだよブラックハーケンって。意味のわからない敵に意味のわからない攻撃。これじゃ世界観も設定もめちゃくちゃじゃねえか！

「さあ壊れろ！こんな世界！壊れてしまえ！」
とブラックハーケンの一声で無数の間抜けモンスターが一切に飛びかかってくる！
「ど、どうすりゃいいんだよ！　」
初っ端から敵に背を見せ、全力逃亡！戦い方なんか知るわけない！無理だって！
「ええと、ええと！これ！」
トゥルルが手渡したのは……
「なんだよこれ！」
「魔法瓶です。これに封じ込めてしまいましょう！」
魔法瓶というのは、要するに保温効果のある水筒だ。仕組みは内層と外層の間を真空にすることによって熱の出入りを遮るという、まあはっきり言って全く魔法とは、魔法少女とも全く関係のないただ『魔法』ってつくだけの瓶だ。つか魔法瓶って死語だろ。
「設定おざなりも、行き当たりばったりもいい加減にしろ！そんなただ魔法ってついてるだけで魔法要素ゼロのもんで何が出来るんだよ！」
「だから封印ですって！ヤ〇ンを全部回収してください！」
「アホか！なんで魔法少女でポ〇モンみたいのことやらないと行けねえんだ！」
無数のヤ〇ンモドキ攻撃から逃げまくって、俺たちは、公園にたどり着いた。
噴水の前のベンチに腰を下ろす。息が切れてる。
てかまた俺って言っちゃってた！ああ違う！わたし！わたしなのー！！
「で……、どうやって戦かやいいんだ？やっぱヤ〇ン無限回収しないといけねえのか？」
「ちょっと待ってください、今、歪の属性を調べてみますから」

トゥルルはパチパチ、パソコンみたいなやつのキーボードを叩いた

「出ました。ええと……ブラックハーケンさんは二十八歳独身女性。大学卒業後高校教師目指して教員採用試験を受けるも失敗を重ね、現在は派遣会社に努めています。派遣先でセクハラや、正社員の先輩の嫌がらせでストレスをため、行き遅れと酒と煙草と肌荒れ、仕事のこと、将来のことに悩んでいます。それが怨念となって歪みを生んだんです！」

と、トゥルルが言ったところで、俺は、その糞妖精のおもいっきり掴んでやった。

「なんだそれ！ブラックハーケンって、ブラック派遣に勤めてるからかボケ！そんなブラックジョークいらねえんだよ！付け焼刃の声優ネタ絡ませる暇あったら、ちゃんと世界観に合わせた敵キャラ登場させろよ！中の人の事情なんか知ったこっちゃねえ！どこの世界にババアの悩みと戦う魔法少女がいるんだ！アホ、ボケ、カス！」

「うわああ、たかしさん、後ろ、後ろ！！」

「かなだ！っつってんだろ！地蟲にするぞ！クソ妖精！」

と、そこへベトリ何か液体が飛んできた。よりにもよって顔に。

俺、わたし、はゆっくり振り返る。目だけが光っていて、こっちを見ていた。モンスターも一緒に居る。真新しいピンクのドレスが真っ黒になる。許せない！

「よ、よくも乙女の美顔を汚してくれたな」

袖で拭う。さっきのやつだ。無数の雑魚

「お、お前みたいなガキに何が分かる！」

「へー喋れるんだ。そんな不細工な格好でも」

「黙れ！お前に何が分かる！お前みたいなガキに、女のなにが分かるってんだ！化粧も必要ない、肌荒れなんて無縁、おしゃれにも周りにも気を使わなくなって、ちやほやされて、失敗してもカワイイからの一言で済まされる！お前らみたいなガキが悪いんだ！ガキは消えろ！！失せろ！死ね！！」

またヤ◯ンを飛ばしてきた。でも、わたしはそのすべてを避けた。

見切ったのだ。こいつの攻撃の特性を。次第に数は増える。精度も荒くなる。そのたびにヤ〇ンは継承崩壊をしていてってただの黒い水鉄砲になっていった。
「仕事だってまじめにやってる！！上司にだって、先輩にだって気を使っているのよ！！なのに給料は上がらない！いつ切られてもおかしくない派遣社員のまま！おまけに先輩には毎日毎日嫌がらせ！もうこんなの耐えられない！」
「何だそんな事か。くだらないわ！」
「黙れガキ！お前みたいなガキに！あたしのこの気持が分かるか！」
「わかんねえよ！解ってあげる気すらないわ。おばさんの気持ちなんて」
「なんですって！」
ブラックハーケンは襲いかかってくる。黒い塊が高速でこちらに飛び込んできた。
わたしは怯まない。地面を蹴って、後ろへ下がりながら、魔法のステッキを振るう。
出てきたのは、アーチェリー。ハートのステッキが独りでに伸びて、矢へと形を変える。
わたしはそれを目一杯引いた。
「よく聞きな！おばさん！あんたが思っている程、現実は甘くないのよ！」
ハートの矢は一直線、ブラックハーケンに向かって突き進む。真紅の粒子をまき散らしながらそして、彼女のど真ん中に風穴を開けた。
直後、竜巻のような風が吹いた。公園の砂が巻き上がる。わたしは目を閉じた。トゥルルはあわわ、あわわわ、言って吹っ飛んでゆく。
「やったか」
風が収まり、粉塵が消え、視界が戻る。
「何！」
ブラックハーケンはかろうじて立っていた。風穴を黒い液体がゆ

っくり塞いでゆく。
「あ、あたしだって……」
でも動きが鈍い。いや、形がだんだん崩れてゆく。
「が、頑張ったのに……、頑張ったのに……」
「だから何？」
「辛い事も、苦しいことも遭ったけど、ずっと我慢してきた。なのに……」
「だからそれが甘いって言ってんのよ。まだわかんないの？」
ブラックハーケンは何も答えない。形はみるみる崩れ最初の半分位の高さになっていた。
「あんたがいくら頑張っても、辛いこと、嫌なことを我慢しても、そんな努力は無駄よ。何故だかわかる？ただ苦しいだけだからよ。あんたのやりたいことなに？仕事？先輩に気を使うこと？お酒？タバコ？肌荒れを隠す化粧？違うでしょ？そんななのはごまかしにすぎない。もっと違うはず。あんたのやりたいこと他にあったはずよ。なのに、それを投げ出して、ただ現状に甘んじて、今の仕事をとりあえず続ける。それがダメだのよ！ただ、辛いこと我慢するだけで、嫌な事を頑張るだけで、報われるんだったら、病人はみんな最後に幸せになるはずよ。でも違うわ。そうじゃないの、それが糞世(ヘギユヴァ)なの！」
「だからいいの。無理しなくたって。もう頑張らなくたって」
やさしく言った。包みこむような声で諭すように。
わたしは弓を引く。静かに、ゆっくり。
「もういいのよ」
弓は綺麗な放物線を描いて、ブラックハーケンに突き刺さった。
桜色に光る優しい炎が彼女をつ包む。そして消えていった。
噴水の水がキラキラ光っている。それはまるで美しい涙のようだった。

2

目が覚めた。例によって俺の部屋のベッドの上だ。
「う、ううう……」めまいがする。喉がカラカラだ。ものすごく腹が減っている。
今何時だ。時計を確認する。夕方の五時だ。あれ、おかしいな。携帯の日付を見た。九月四日。ほぼ一日じゃん！
「オイ、どうなっている？」
あれ、あの妖精またいない。いや、いた。例によって俺の布団でぐうすか寝てやがる。俺はそいつを拾い上げて壁におもいっきり投げつけてやった。
「ギュベッ！」と、壁にぶつかった瞬間変な声を出してその後床に落ちた。
「はれ、たかしさん。ほはようごらいます（おはようございます）」
「おはようじゃねえ。夕方だぞ」
「はっ？ホントだ」
窓から差し込む夕日がとても眩しかった。ってそんな感傷に浸っている場合じゃねえ、飲み物、飲み物と。机の上にペットボトルが置いてあった。中身はただの茶だが俺はそれを一気に飲み干した。
そうだ飯、飯と、部屋のクローゼットにしまい込んだカップ麺を二、三個と取り出してから、一階へ。湯だけはこの部屋で沸かせないからな。

部屋の戸を開ける。すると、そこにはラップをかけた皿に焼き飯が入れられていた。
上に小さなメモ用紙が置かれている。
「たかしくんへ。お願いだから出てきて下さい。お母さん」
と書かれている。俺はそこで手を合わせ、ありがたくそれを頂くことにした。冷めていたがとてもうまかった。一仕事したあとの、

飯はなんつうか、うまい！
「ずるいです！わたしも腹ペコです！下さい！」
「働かざるもの食うべからずだ。お前今回全く役に立たなかっただろ」
「そ、そんなぁ」
「それよりさ、あの後あいつどうなるんだよ」
「歪ですか？元に戻りますよ。だいぶストレスを放出したのでしばらくは大丈夫ですが」
「そうなのか、死ぬわじゃないんだな」
ちょっと安心した。死んでたらさすがに罰が悪い。いやそれはいくら何でもねえか。いや、こいつの場合あり得る。
「じゃあ一つ頼みだ。あいつの居場所調べてくれ？出来るよなそれくらい」
「え、出来ますけど、どうするんですか？あっても本人は覚えていませんよ」
「いいから、それ調べてくれたら飯分けてやる」
「わ、分かりました！ありがとうございます！」

そんな訳で、俺たちはとあるマンションへ。一人暮らしの用の狭いワンルームマンションだった。
俺はその女性が住む部屋の郵便受けにＤＶＤを一枚入れた。
「何ですかそれ？」
「アニメのＤＶＤだ。女子高生がバンドやるアニメだ。高校教師目指してたんだろう？これを観たらきっと思い出すだろ。その頃の情熱、その頃の希望」
それだけ済ませて、俺達は帰路に着く。
「結局、何だったたんですかね、あの歪」
「なに？お前そんな事も分からないのか。夢を忘れ、ただ現実に甘

んじて今の生活を我慢するだけの毎日。それがいけなかったんだよ。だからさ、これからはアニメを観るべだ。それでほんの少しの時間だけでも、嫌な現実を忘れるべきなのさ」

澄んだ青いそらだった。それはまさに、アニメ全話をコンプリートした時のような清々しさに等しい、澄み切った空だった。

◆次回予告◆

はじめまして、夢崎かなです！かなって呼んで下さい。

まんまですね。

うるさボケナス妖精！キャハッ、ごめんさい？

キモイですよ！そのぶりっ子！

黙ってろ！それ以上無駄口叩いたら地蟲にするぞ！

わっ、わわわ！やめて！！

というわけで次回はなんとライバル登場！！お友達になれるかな？

A―1

「ぐぇぇっ！気持ち悪りぃな。腹も痛えし。ってオイ！」
　トゥルルが居ない。まただ。俺、じゃねわたしは布団の中を探った。すると我が物顔で寝てやがるアホ妖精を発見。仕方がないのでやさしくぶん投げて起こしてあげました！
「ギュベッ」と、壁に激突して、落ちてゆくトゥルル。
「何するんですか！」
「だってぇ?トゥルルったら何度起こしても起きないんだもん？」
「き、気持ち悪！オゥえっ！」
「なんか言ったか？（地蟲にするぞコラ！）」

「にしても、三日か。その間この世界はどうなっていたんだ？」
「えっ？そのまま動いていますよ。まあたか、じゃないかなちゃんの存在が消えているとまずいので一応ダミーを動かしていますが、特に目立ったイベントは起きていません」
「そうなのか」
　コイツはコイツで一応仕事はしているんだな。と、わたしは少し感謝してさっき投げてしまったことをちょっぴり反省しなきゃいけないかな、とちょっとだけ思った。
「さてと、着替えなきゃ。ってもう晩飯じゃねえか（現在、十八時二十分）」
　私は急いで、タンスを開けた。魔法少女が一日中パジャマのままってのはマズイ。そういうのはなにか落ち込んだ時にやるものだ。
「ええと、これかな？こっちのほうが可愛いかな」
「ぎゅぇ……吐き気する」
　前言撤回。やっぱりコイツはクソ妖精だ。わたしは部屋の本棚から一冊の重たい辞書を取り出して妖精さんに向かってぶん投げてあげました。さすがに当てはしないけど。

「ぎゃあ！！何するんですか！！」
「黙れクソ妖精！」
気を撮り直して、服を着替える。女の子の着替えにも、少しは慣れたし。
パーカーとデニムスカートにしておいた。地味だけど、今日は特に出かけていないからこれくらいにしておこう。
「よしっと。そうだ。リボン、リボン」
魔法少女といえばリボンだ。だからトレードマークとなるリボンを決めなければ。
わたしは椅子に座ると、机の端に置かれた小物入れから髪飾りを色々取り出してみる。
「こっちと、こっち、どっちがいい？」
ところが、クソ妖精は……。また寝てやがった。わたしはおもいっきり蹴飛ばしてやりました！ギュボーンッ！！
「テメーなヤル気あんのかボケ！」
「そんな事言ったって、三日連続ほぼ徹夜でアニメ観て、いい加減疲れました！少しは休ませて下さい！」
「アニメ観ねえとこっちに来れねえって言ったのお前だろ！」
「それはたかしさんだけです。わたしには必要ありません！なのにどうして一緒に見ないといけないのですか！」
「かなだっつってんだろ！お前がアニメのこと分かってねえから少しは勉強させてやろうとしたんじゃねえか！」
「そんな事ありません！ちゃんと学校で勉強しましたよ！」
胡散臭いな。学校出たとして、多分こいつの場合は数えたほうが早い同しようもない劣等生だろう。いや、そうに決まっている。絶対。
「じゃあ聞くけど、俺の家族構成どうなっている？」
「母一人小一人の母子家庭ですよ」
俺はすかさず、床へたたき落としてやった。あ、また一人称が

俺になってる。くそう！
「ふざけんな！少女漫画っじゃねえだ！魔法少女の主人公はそんな悲劇のヒロインじみた設定じゃねえんだよ！」
「ま、魔法少女のヒロインは、そんな股を広げて乱暴な言葉を吐かないと思います……」
「はッ」
おっといけない。わたしは慌てて足を閉じて、スカートを抑えた。今どさくさに紛れてパンチラ見た奴いたらぶっ殺す！
「と、とにかく、そんなのは駄目だ。いいか、ここからはオフレコだぞ」
「はは、ハイ！」
トゥルルは慌ててステッキを振るった。同時に時計の秒針が止まった。
「時間を停止しました。ここからのやり取りは世界軸に記録されません」
「そんな機能があったのかよ。だったら早く言えよ」

「とりあえず、父親とあと弟は絶対」
「そんなに一変に無理ですよ！わたしの立場も考えて下さい！」
「仕方ねえな！ほんと（クソ妖精だなコイツ。まあこれは言わないでおこう今回は）」
というわけで例によって、俺はメモ用紙に書きだしてやった。
父　外資系商社社員。現在海外にいる。母と同級生。娘を溺愛する超カッコイイパパ
弟　十一歳。現在病気のために入院中。
「どうだ。これならしばらく時間稼げるだろ？」
「は、はい（って、さり気なく娘を溺愛するって何？）」
「なんか言ったか？　」

「いえ、でもなぜ弟？妹のほうがいいんじゃ」
「アホか！妹なんて生意気でうざいだけだ！妹が可愛いなんてのはな二次元だけなんだよ！現実（リアル）で可愛い妹なんて居るわけがない！それに俺は『かな』なんだ！ブラコン設定にしたほうが絶対にいい！」
「意味がわかりませんが。というか、二次元ですよここ。まあとりあえずすぐに出さなくていいんなら助かります。ではこれで行きますね」
オフレコモード解除。トゥルルがそう言うと、時計の針が再び進む。

「ああ、弟か。楽しみだな？さてと、リボン、リボン」と、わたしはウキウキモードで洗面台へ。早く会いたいな弟。名前何だっけ？まあいいか。

洗面台の前にたって、リボンをよいっしょっと結んでみる。にしても可愛いな、俺。ってこの洗面台もまんま俺ん家じゃん。数日前、ヒゲで絶望したあの鏡が今、こんなにも可愛い少女を映し出しているとは……
「あれ、なんだこれ」
うまく結べない。どうなってやがる？リボンが思う通りに動いてくれない。
無理もない。リボンなんて結んだことないんだからな。どうしよう？
「何やってるの？」
「ふぇッ！」
いきなり声がした。びっくりした。振り返るとそこには、見た目二十代後半くらいに見える、つややかな長い黒髪をした、どことなく自分に似た、美人の女の人がスーツ姿で立っていた。
「あ、えっ……」
「はら貸して」

その人は、わたし（かな）のお母さんだ。ママって呼ぶべきなのかな？

「はい。できたわ」

「あっ、ありがろん……」

とても柔らかい手だった。暖かかった。そして、優しかった。結ばれたリボンは可愛らしく、鏡に映った自分はこれまで見たことのないほど輝いた。一生解きたくない。そんなふうにさえ思えた。

っ たく、家のカーチャンとは偉い違いだ。

＊

トゥルルです！ちなみにその頃、たかしさんのお家がどうなっていたのかというと、

お母さんはたかしさんが引きこもって二日目に家出、妹さんは友達の家を泊まり歩き、お父さんは一人寂しくコンビニ弁当で過ごす毎日を送っていました。

たかしさんのせいで、石村家は家庭崩壊への道を着実に歩んでいたのでした。

「雰囲気ぶち壊すなボケ！（ｂｙたかし）」

＊

「あ、いけない。お風呂湧いたんだ」といって、ママはわたしのリボンを解こうとした。

わたしは慌てて「え、解いちゃうの？」と言ったが、「あとでもう一回やってあげるわ」と優しくいってくれたので、素直にうなづいた。

「久々に一緒に入ろか」

「え゛っ？」

それを聞いた瞬間。お、わたしは、凍りつたい。いや、それはマズイでしょ。いくらなんでも……俺、男。いや、今は女だけど、いや、それ以前に自分の見るのも……だし、こんな美人のママと一緒

にお風呂って。
『オイッ！トゥルル何とかしろ！』
妖精とのわたしの間では念話が可能なのです。という情報をついさっき聞かされた。
肝心なな事はいつも後から聞かされる。
『へ？何がですか？』
『これまはマズイだろ！こんなお色気シーンいらねえだろ！』
と言ってる間にもママはブラウスのボタンを外し、「どうしたの？早く脱いじゃいなさい」って言うし、クソ妖精は『いいじゃないですかー！かなちゃーんは女の子なんだから』と、白々しい返答をしやがる。

—という訳で、これは不可抗力です。
「どうしたの？そんなにモジモジして。こらッ。さっさとタオル取っちゃいなさい！」
「ひゃーあっ」
「何よ。さっきからよそよそしい。どうしたのよ？」
「べ、別に……」
「さては、ママに裸見られるの恥ずかしいとか思っているのね。思春期ちゃん！」
「ち、違うって」
まさこんな展開になろうとは。クソ妖精何してやがる！
『時間止めろボケ！』
『無理ですよーッ！無闇に流れを止めてしまっては、世界の進行に支障をきたします』
畜生！ええい！もうやけくそだ！
「背中流してわげるわ」
「えええ、ああ、……どうも」
「ホントにどうしたの？なんか今日変よ」

「ううん、そうじゃなくて。な、なんか久々だから緊張しちゃって」
　いや初対面ですけど……
「何いってんのよ。母娘でしょ」
「うん」
　う、うまく言ったかな？今の。

「よいしょっと。二人だとちょっと狭いわねこのお風呂」
　ママのボインが背中に……、にごり湯だったのがせめてもの救い。
　やべえ、鼻血出そう。やめろそんなの！頼むから！
「お、温泉でも行きたいね」
『うわーキモォ！』
『黙れ！こうなったのも全部お前のせいだからな！』
「そうね。かいとが退院したら、家族みんなで行こうか。あ、でもパパのやつ、相変わらず海外転々だからいつ帰ってくるか分からないし。私も仕事あるからなぁ」
「う、うん……。無理しなくても」
「ごめんね。かなにばっかり負担かけて。あなたにばっかり我慢させてほんとうに申し訳ないわ」
　そ、そうなのか？そうだったのか俺、いや、わたし……
　あれ、なんで？涙が……
「ど、どうしたの？かな。ごめん。そんなに辛かったの？お母さん—」
「違うの。辛いとか、そういうんじゃなくて嬉しくて」
　いや違うんですよ！ものすごく感動しているのですよ！うちの糞ババと違ってな！！
『おい、トゥルル！GOOD　JOB！このカーチャンはサイコーだ！』
『よ、よかったですね……（気持ちわりッ！さすがにヒクわ）』
「ごちそうさま！」
　飯めっちゃうまいじゃん！こんなうまいクリームシチュウ食っ

たことねえよ！
「そんなに美味しかった？」
「うん」
　わたしは満面の笑みを浮かべて言った。ママはとても嬉しそうだった。
「おっといけない。そろそろ行かないと、面会時間終わっちゃう」
「わ、わたしも一緒に行っていいかな？」
「ごめんね。小児病棟は子供は入れないのよ」
「そ、そうなの」
そうか、俺中学生だったんだな。でも、今日はママに会えたからいいか。
「悪いけどお皿洗っといて」
そう言って、ママは急いで玄関へ向かった。
「ハーイ！」
わたしは気持ちよく返事した。けど、ちょっと待てよ？皿ってどうやって洗うんだ？　と、思った瞬間、悲劇が訪れた。
「トゥルルちゃん？いったん糞世（ヘギュヴァ）に戻りませんか」
「どうしてですか？いい感じなのに」
お、わたしは、お腹の当たり、いや正確にはもっと下を抑えたい衝動に駆られた。けど、このクソ妖精にそれを悟られてはマズイ。
「おトイレならあっちですよ」
「んなの知ってるわ！お前が手抜きしたせいでこの家の間取りまんま俺んちだもんな！」　ち、悟られてたか。どうする？そうだ、戻りたいと思えば戻れるんだ。
「あ、基本的に区切りがつくまで戻らない様に処理しておきましたら、安心して下さい」
「なんだそれ！そんな事出来るんかよ！だったら早くやれよ！」
「ある程度世界が定まってきましたから、そういうことも可能になるのです」
　クソッタレ！こういう時に限ってよく仕事しやがるこのクソ妖精。

もう限界だ！我慢出来ない！これ以上待ってたら、エロアニメになるぅう！

わたしは急いでトイレへ駆け込む！キャハァァァーン！！

「疲れたー。ただの日常シーンで何でこんなに神経を使わなゃならんのだ」

わたしはベッドにバタンキューだった。マジで今日は疲れた。

「まあ初めはこんなもんですよ」

「お前めんどくさくなったらそれでごまかすだろ」

「てへ？」

うざ、コイツ。マジで羽ねちぎってやりたい！

もう怒る気になれなかったので、寝ることにする。

電気を消してっと。

「おい、今後の展開どうなる？いい加減友達作りたいんだけどさ」

「そうですね、ここ最近歪（ひずみ）もおとなしいみたいですから仲間の登場シーンでもやっちゃいましょうか」

「オフレコだよな？今」

「あっ！」

駄目だコイツ、早く何とかしないと。

A―2

疲れたー。ただの日常シーンで何でこんなに神経を使わなゃならんのだ」
　わたしはベッドにバタンキューだった。マジで今日は疲れた。
「まあ初めはこんなもんですよ」
「お前めんどくさくなったらそれでごまかすだろ」
「てへ？」
　うざ、コイツ。マジで羽ねちぎってやりたい！
　もう怒る気になれなかったので、寝ることにする。
　電気を消してっと。
「おい、今後の展開どうなる？　いい加減友達作りたいんだけどさ」
「そうですね、ここ最近歪（ひずみ）もおとなしいみたいですから仲間の登場シーンでもやっちゃいましょうか」
「オフレコだよな？　今」
「あっ！」
　駄目だコイツ、早く何とかしないと。

　そして次の日。
「ふあーッ。おはよう」
　顔を洗ってリビングへゆくと、食卓には、サラダとトーストとハムエッグ、そしてコンソメスープという、絵に描いたような見事な朝食が用意されていた。
「春休みだからっていつまで寝てちゃだめでしょー。転校早々遅刻なんてかっこ悪いぞ」
「ご、ごめんなさい」
　ママが朝食を用意してくれている。こんな感動的なシーン初めてだ。

家の糞ババも少しは二次元見習え！
って、あれ？あのアホ妖精どこいった？部屋にいなかったから先に起きて俺の朝飯勝手につまんでやがると思ったがどこにも居ない。まあいいか、いたらいたでウザイだけだし。
「どうしたの？そんなにキョロキョロして」
「え、あ、テレビのリモコン」
テレビのリモコンは確か、あれ、俺んちなら机の上かソファーに放り出されているはずなのに……
「そっちよ」
ママが指さしたのは俺ん家にはない、可愛らしい小物いれだった。テレビ台の上に置かれている。その他もきちんと整理されている。仕事と病院で忙しいのによくこれだけ綺麗に片付けられるな。と、わたしは感心した。

「コーヒ飲む？」
「あ、うん」
うわ。インスタントじゃない豆から引いているよ。すげーマジで本格派だ！！
「ミルクここ置いとくから好きなだけ入れて。シロップはこれ」
「ありがと」
どうしよう……いつもインスタントのブラックを適当にすすっているけど、ここはやっぱり女の子らしくミルクと砂糖を入れるべきかな。うん、入れるべきだ。
「おいしい」
「昨日からそればっか」
「だってほんとうに美味しいもん。ママお店とか開いたら？」
「そうね、そろそろそうするのも悪くないかもね」
「え、ホント？」
「ママの夢なんだ。小さな隠れ家レストランみたいなの」
「絶対うまく行くよ！か、わ、わたしも手伝う！」

『何が手伝うですかーッ！』

なんか聞こえた。せっかくの親子水入らずほんわかモードが台無しだ。とても重苦しいドローとしたどす黒い声だ。あのクソ妖精！

毎回毎回雰囲気ぶち壊しやがって！

『ったく、人の苦労も知らないで、朝からキモイこと言っちゃってさあ』

「ヒィッ！」

見るとそこには、眼の下にクマ、全身から負のオーラをおもいっきり漂っている、妖精トゥルルが、ふらふらと浮いてこっちへやって来る。

「ど、どうしたのかな」

「な、何でも」

「えっ？何？」

『おい、どこ言ってたんだよ』

そうか、ママにはコイツは見えないのか。

『ちょっと呼び出しを食らったんですよ。誰かさんが無理やり主人公にしろなんていうから、わたしどうやらルール違反をしたみたいで、査問にかけるとかかけないとかで、大変だったんですから』

『そ、そうなのか。で、どうなるんだ？』

『知りませんよ。お偉いさんはこんな世界は認められんとか言っていますが、わたしも頑張ったんです！今更後に引くなんてできません！だからよ、かな！こうなったら絶対成功させてやるぞ！糞爺共の思い通りになると思ったら大間違だボケ！老人は墓穴に片足突っ込んでろ！』

うわああ、荒れてる。荒れてるよ。いつものトゥルルじゃないよ。

「どうしたの？かな。さっきなんか怖そうな顔して、顔色も悪いし、熱でもある？」

とママが優しく額手を当てた。細くて綺麗なピアニストのような手だった。

「ち、違うのテレビ……ニュースの……が……」

テレビのニュースの声は告げていた「続いては少女が連続で行方不明になっている事件です。現場からは相次いで少女の着ていた服と思しき衣服の端切れが見つかっており……犯人は未だ見つかっておらず、警察では引き続き捜査を……」と。

「怖いわね。あなたも気をつけなさい。暗くなる前に帰ってくるのよ」

「う、うん」

「じゃあ、お母さん仕事行ってくるから」

「さてと、ますは皿洗い。あと部屋の掃除だな」

昨日は泡だらけにして失敗したから今日は洗剤の量を気を付けないと（さすがに皿を割ったりなんてドジっ子はやらなかったけど）、かなり危なかったし。

「ふー疲れた。部屋は元々片付いていたから掃除には苦労しなかったけど、皿洗い大変だったな」

四苦八苦しながらもなんとか部屋の掃除を終え、（まあ元々きれいだったから大してすることもなかったんだけど）わたしは友達と出会うため出かけることにした。

場所は少年野球や草野球で使われる小さなグラウンドの裏、細い私道だった。

あ、今日の服は白いブラウスにカーディガン、とゆったりしたスカートみたいな☆

もちろん、昨日ママに結んでもらったリボンもしっかり自分できるようなりました？

「もーかなちゃんたら、そんな事ばっかしていたらライバル登場シーンはいつまでも出来ないじゃないですか」

「ごめん、ごめん。っておい！ライバルなのかよ！」

「いけませんか？ライバル↓バトル↓仲良くなるみたいな方が盛り上がるかと思ったんですが」
まあそうか、コイツもなかなか分かってきたじゃないか。
「で、このあと歪とバトルしてるところに乱入というシーンを予定しているのです。名前はアニータって言って、かなちゃんと同い年のもう一人の魔法少女です」
「あのな、ネタバレしてどうするよ？オフレコじゃねえだぞ今」
やっぱわかってないじゃねえか。一瞬でもコイツに期待した自分が馬鹿だった。

と、その時だった！突如グラウンド中央に竜巻が！
「大変です！歪です！」
わたしは、とっさに変身しようとバッグからステッキを。
「キャーッ！」
トゥルルが吹き飛ばされる。わたしは慌てて、なんとか捕まえた。でも、ステッキを落としてしまった
「しまった！」
ステッキが竜巻に吸い込まれてゆく。竜巻は五メートルほどの高さだ。竜巻は金網を超えてグランドの中央へ。ステッキはもう見えなかった。
どうしよう？あれがないと変身できない。魔法も使えない。
　竜巻が勢いを増す、当たりに凄まじい暴風をまき散らして住宅街の方へ進み始めた。私はスカートを抑えながら、グラウンドの周りの道を走って、竜巻を追おうとした。
ドキューン！
青白い光線が走った。その瞬間、竜巻が雲散霧消。竜巻は跡形もなく消えてしまった。。
「ゲホッ、ゲオっ」
砂埃がすごい、咳き込んで目も開けられない。
視界がようやく戻り、グラウンドの中央を見ると、人影が。ライ

バルの魔法少女か？
「危なかったな。もうでーじょーび（大丈夫）だ」
「は？」
砂埃のが落ち着いて明らかになる視界の先にいたのは、わたしより背が低くて、背中に大きな鞘を抱えて、右手に大きな両刀の剣を携えた、男の子。ツンツンの黒髪に、紺色の胴着みたいな格好をしている。まるで少年漫画の主人公のようだ。え？？なんで少年漫画？
「ど、どうなってるんだよ！オイ！あれがライバルの魔法少女か？」
「ち、違いますよ。あんな子知りませんよ」
トゥルルも慌てている。知らないどういうことだ。端ないと思いながらも、わたしは金網を超えて（降りる時、ちゃんとスカート抑えましたよ）グラウンドに降り立った。

「久しぶりだな。ティオ」
さっきの少年とは違いもっと低い、大人の声だった。その声が聞こえた途端、
「兄様！」と、トゥルルが飛んでいった。本当に飛んでいった。わたしはグラウンド中央を目で確認する。少年お足元には魔法のステッキが落ちていた。少年はそれを拾い上げ、こっちへ放り投げた。
「ホラよ」
わたしはそれはキャッチして、彼に視線を送る。なんだんだあいつ？何なの？
「あれ、分かんねえか？オラだよ、オラ！」
「はい？どちら様で？」
わたしは少年にさらに近づいて、確認するが、こんな奴知らない。それより気になるのは、横で涙を流して抱きついているトゥルルと、それを受け止めて、なんか微妙に照れている美形の、これまた綺麗な長い黒髪をした、どっかのファンタジーモノに出てくるようなマ

ントと甲冑を身に纏って、腰に剣を携えた男の妖精だ。
トゥルルより三センチ弱背が高い。
「元気だったか？」
「ええ」
「あの歪に飲み込まれてから一時はどうなったかと心配したが、メールで無事を知って一安心はしたものの、やはりこうして合わないことには落ち着かなくてな」
「わざわざ会いに来てくれたんですか」
「ああ。それもあるが、実はさっきの歪、俺のミスで逃してしまったやつでな。他の世界に迷惑をかける前に始末しようとしたんだが、やはりお前は優秀だ。先に見つけてくれたんだな」
「にしても、ティオ、お前よくやったな。これはすごい成果だよ。堅物の老人たちもこれで考えを改める。お前はやっぱり優秀だ」
「えへ？そうです？やっぱりお兄様が教えてくれたからですよー」
「それより腹減ったなー。なんか食い物ねえけ？」
「エカテリーナ。さっき猛獣の肉を食べたばかりだろう」
あれ、なんか俺、置いてきぼりくらってね？主人公なのに、ていうか、あの妖精についてはなんとなくトゥルルの兄貴っぽいってことはわかるけど、この少年はなんだ。妖精が付いているということは、まさかコイツも主人公？そういや、さっき他の世界がどうのとか言ってたよな。

A—3

「あ、あの……」
すっかり仲間はずれにされていたので、このままではいけないと思い声を発してみた。
「あーわりぃ、わりー。オメーのことすっかり忘れてたわ。たかし」
何だと！俺の本名を知ってやがる！何だコイツ！なんだ！わたしは顔面蒼白、ヤバイ、コイツはヤバイ、一歩、後ろへ下がった。魔法のステッキを持つ手が震える。全身がガクブル状態、ヤバイ、ヤバイって何こいつ！
「そんなに慌てんなって。オラだって。ほれ、分かんねえか？」
分かるわけ無いでしょ！何なんだコイツ！お前なんか知らねえよ！マジで！！
「分からないと思うぞ、エカテリーナ。お前のキャラは完璧過ぎるからな」
「そうか。ほんじゃしゃーかったねえな」
「あの……、兄様。この方は？」

「ほらあたしよ、あたし。これで分かるでしょ？なに、まだわかんないの？ったく、ロクでもない息子ね」
「え？」
聞き覚えのある声だった。ものすごく。いや、この声、そしてこの喋り方、それに、『息子』って……
まさか……
「もしかして……、かかか、カーチャン？？」
「そうだべ。そうだべ。やっと分かったか！ワァハハハッ」
ヒューとさぶい風が吹いた。頭が真っ白になった。一瞬思考が停止する。何も言えない。何も考えられない。どうすればいいのかも分からない。よりにも寄って一番あっちゃいけないない奴にあってしま

った。なぜ？どうして？てか、何でカーチャンが？ええ？
　沈黙が続く、誰も何も話さない。ていうか話せない。
物凄い帰りたい衝動にかられる。穴があったら入りたい。母親にこんな姿を見られた。もう死にたい！マジで！
「何？せっかくこうして会いに来てやったのに、なんでなんも言わないわけ？感想は？母親の凛々しい姿を見れて嬉しいともわないわけ？あ、オラはエカテリーナ三世。カーチャって呼んでくれ」
　それを聞いた瞬間どバーン！なんか頭のネジが外れた！
「てゆーか！ババア何やってんだそんな格好して！」
　よく見たら胴着の左に胸に〇Ｊ（ ' ー\` ）し　と、某匿名掲示板ンで使われているカーチャンマークが。カーチャンだからカーチャってか？なんかアホらしくなってきた。
「見てわかんねえか？冒険ファンタジー世界のヒーロだば！そういうあんたこそ何やんっての？女の子みたいな格好して！」
「みたいじゃなくて俺は正真正銘の女の子なんだよ！魔法少女だよ！悪りぃか！」
　ええい！こうなったら開き直りだ。これが本当の俺の姿だ！どうだ糞ババア！
「ふーん」
　返ってきた言葉はそれだけだった。あれ？以外にあっさりとしてな。
「どうりで。湊（みなと）のビデオこっそり見ていると思ったらそういうことか。なーんだ。カーチャンてっきりあんたが本当は女の子として生まれたかったのかと思って焦ったわ」
「ちげーよ！」
　って、バレてたのか、バレてたのかよ！オイ！
「ま、別にいいけどさ。オラはオラの世界で楽しくやってるし。な、帝王（カイザー）！」
「カイザー？」
　と、わたしがカーチャンの肩の上に居る妖精をに視線を送ると。

そいつは片膝をついて、
「申し遅れました。私は世界管理省、一等守護妖精トゥーリオンと申します。トゥルルの兄です」
「ど、どうも……」
「何照れてんですか」
　クソ妖精がなんか入った。たたき落としてやりたい衝動に駆られたが、この兄の前では大人しくしておいたほうがよさそうだ。
「べ、別に照れてなんか……」
　にしてもカッコイイなコイツ。頭もよさそうだし。なんかこっちの方がいいな。
「あ、ちなみに帝王っていうのはコイツのあだ名な。コイツマジで強えかんな。ホンマめっちゃつおいねん！」
　何だその方言めちゃくちゃの喋り方は？意味あんのかよ。

「さてと、腹も減ったことだしそろそろ帰るぜよ。んじゃ帝王（カイザー）頼むわ」
「Ｙｅｓ！ＭｙＲｏａｄ！」
は？何でコイツ、こんな奴に服従してんだ。なんだよイエス、マイロードって！
「え、兄様。もう帰っちゃうの？」
「ああ、用も済んだことだしな」

「ちょっと待て！何でカーチャンが少年漫画のヒーローみたいな奴になってんだ！」
「みたいじゃなくて本当にヒーローだべ。オラ」
「はい？」
「実はな、ここ最近歪の数が爆発的に増えていてる。今ある世界だけでは処理できなくなっている。今までみたいにキャラをじっくり養成している暇は無い。その為、かねてから糞世（ヘギュヴァ）から優秀なキャラを発掘して最初から世界を作って主人公をやらせるという方法を取

ること案が出ていたんだが、お偉方が難色を示してな。なかなか実行に移せなかった。だが、妹が前例を作ってくれた。それを皮切りに俺達若手が次々に行動を起こしたって訳なんだ。君の母上もそれに協力していただいている」

　何だその超展開は！俺の知らないところで、っていうか、なんでこのクソ妖精の手柄になってんだボケ！

「そうなのか。じゃなくて俺が聞きたいのはカーチャンの方だ！あんたアニメなんか興味なかっただろ！」

「そうなんだけどよ。お父さんと喧嘩して実家に帰ったらば、久々にオラの部屋の押し入れにしまった漫画呼んでやー」

「その喋り方やめろ！ものすごく鬱陶しい！」

「したら面白くてさ。ついついハマってコンプしたんだわ。なんか若い頃思い出したなーそいういや漫画家に成りたかったたんだっけ？あたし。就職して、結婚して、子供産んでからつい忙しくなって漫画もアニメも忘れちゃったけど、やっぱりロマンのない人生なんてダメよね」

「あの……、それで家に帰って来なかったの？」

「あんな家、知ったこっちゃないね。ビッチで小生意気な娘とヒキニートの息子、加齢臭漂う白髪の頑固親父しか居やしないじゃないの。何が悲しくてあんな家の母親やってなやいけないの？そんな事より冒険、冒険！さあ今日も龍の卵を集めるぞ！」

　あー腹減った。なんか無いかな。そんな事を言いながら、カーチャンは胴着のポケットから、卵を取り出した。鶏の卵くらいの大きさだったが、見たこと無い模様だった。

　そして片手で割って口へ放り込んだ。

「え、エカテリーナ。それは龍の卵……」

「あっ、いけねえ！またやっちまった！」

　妖精兄が頭を抱えた。「またか。せっかく集めてもこれじゃ意味が無いだろう」とぼそりつぶやいている。何かものすごく苦労しているのではと思わずにはいられなかった。

「まあ、あんたがアニメばっか見てる気持ちもよく解ったわ。これからはお互い、主人公同士頑張って良い世界作ってゆこうぜ！」
「それじゃティオ元気でな。困ったことがあったらいつでも相談しろ」
「はい！」
「それから、たかし君。どうか妹をよろしく頼む。コイツは優秀だが、経験が少ない、色々不足はあるとは思うが、どうか力になってやってほしい」
「え、ええと……わ、分かりました。あのでも、この世界では『かな』っていうんですが」
「お前、かなっちゅうの？本名とぜんぜんちゃうやん。どっからどうやったらそうなるん？」
お前がゆーな！

「じゃな」
こうして、珍妙なゲストは世界の向こうへと消えていった。なんだかなあ。
「ゲホ、ゲホッ……」どうでもいいけど、いちいち砂埃撒き散らすのやめてくんないかな。

B―1

珍客二人と別れた後、わたしたちはこの間ブラックハーケンと戦った公園にやってきた。大きな噴水の前、公園の周りを囲むよう植えられた雑木林の中から、ベンチに座る女の子の後ろ姿を覗いていた。その子が新たな魔法少女らしい。ベンチに隠れて服は見えない、髪は茶髪でウェーブのかかったロングヘアーだった。

「これじゃあ、ただの変態じゃないですか」

「だって、女の子……に、話しかけたことねえし……」

男に話しかけた経験もほぼ皆無だけどな。

「大丈夫ですよ。中の人はたかしさんと同じ男人です。三十六歳のニートで、一日中アニメばっかり見ている引きこもりさんです」

ブチッ！頭の血管が切れる音がした、ような気がした。

「なんだそれ！おっさんじゃねえか！冗談じゃねえ！お前何やってんだ！」

「え、なんで？なんで？」

「アホか！中の人がおっさんとかいらねえよ！男が女やっても気持ち悪りいだけだろ！」

「でもたかしさんも男の子ですよ。同じような趣味を持った人だから仲良く出来るんじゃ、痛い！いたいですぅ！」

俺はクソ妖精を掴んで目一杯力を入れて握りつぶしてやろうと思った。クソッタレ、何が悲しくて中身おっさんの少女モドキと仲良くしなきゃならんのだ！

「そういう例外は俺一人で十分なんだよ！この前からなんだ！おばはんとか、カーチャンとかおっさんとか、そういうのはいらねえんだ！！いい加減まともなやつ出せ！！」

もしかして、あの美人のママも……なんて考えてしまう。いやいや、あの人に限ってそれはない。きっと中の人も美人だ。そうに違いない。ん？中の人？一体どうなってんだこの世界は。

「あれ？」
そんな事をもいながら、少女を一瞥すると、まるでノイズが入ったように像が乱れた。ハハハ、心が受け付けていない……
「でで、でも……せっかく来てもらったんですし、それに兄様が歪の数が増えているって言ってましたし。だからここは仲良くなって協力して敵を倒すようにしましょうよ」
「し、仕方がないな」
まあ、しょうがねえか、ああやって少女になっているってことは、魔法少女に憧れる気持ちはあるってことだもんな。それに、こっちが本当の世界なんだ。あっちの世界でどういう人間だったかなんて関係ない……。はず……

「あ、あの……」
という訳で、わたしは意を決して、ベンチに座っている少女に話しかけてみた。あれ？また像が乱れた。目を擦る。疲れているのかな。
だが目を開けると、少女の姿は消えていた。
「逃げて下さい！」
トゥルルが叫んだ。ハッとして振り向く。すると何かが飛んできた。わたしの腰のあたりを強く打ち、私ははじき飛ばされた。ベンチもひっくり返った。さっきまで隠れていた雑木林に叩きつけられた。肺の空気が押し出される。視界がぼやける。噴水が見える。が、それに重なるように聳え立つ、真っ黒な巨人がいた。間違いない。あれは歪だ。
「うっ、」
わたしは立ち上がろうとした、けれども、足くじいたらしい、うまく立てない。
「たかしさん！早く！」
木にすがりついてかろうじて立ち上がった。強打された腰を抑えながら、足を引きずりながら、公園の外へ逃げる。

水が降ってきた。
「キャッ！」
トゥルルが叫んだ。と同時に、肌がスースーした。
見ると、水があった場所が溶けてなくなっている。そこだけ服の布が綺麗に消えている。
「なんだこれ！オイ！」
「歪です！」
謎の水はどんどん降ってくる。まるで雨だ。服が少しずつ、消えてゆく、ヤバイこのままじゃ裸にされる！冗談じゃない！こんなところでストリップなんてやってられるか！
「なんなの！この攻撃！」
わたしは必死に走った。激痛が走る。痛みを堪え、なんとか逃げ続ける。

巨人から無数の手が伸びる。そして襲ってくる。
「触手！？」
触手はわたしの足を掴んだ。足首じゃなくて太もも！なんだこのエロ攻撃！
また転んだ。それを見計らって、別の触手が二の腕をつかんでぐるり撫で回す。
「離せ！この変態！俺は男だぁあああ！触るな変態！！」
触手はさらに襲ってくる。逃げられない！助けて！
「緊急回避モード！時間停止！」
トゥルルが叫んだ瞬間、触手攻撃と雨の攻撃、そして巨人は静止した。いや、正確には世界がすべて静止したのだ。
わたしはその気持ち悪い触手を引きちぎった。みると、左肩がかなり溶けていて、はだけている。わたしは慌てて破れた服を抑えた。誰も観てないいけどなんか嫌だった。

「どういうことだ！あれは何だんだ！お前が呼んだのか！」
「ち、違いますよ。わたしも……」
トゥルルは泣き出した。わたしも泣きそうだった。
わたしはベッドに腰を下ろして、足首にシップを貼った。汗をかいて気持ち悪かった。風呂に入りたいのだが、さっきのアレを思い出したら服を脱ぐのを躊躇ってしまう。
「お、落ち着け、泣いてどうする？とにかく敵を分析しないと」
「え、ええ……」
トゥルルはパソコンのキーボードを叩いた。
「一応これが彼女、いえ、彼のデータなのですが」

名前　アニータ（仮）
年齢　十四歳、中学二年生
属性　魔法少女

「なんだこれ？たったこれだけなのか？」
「彼を呼び出した時、わたしは管理省に呼ぶ出されていたので、召喚は映像による自動プログラムにさせていたのです。細かいことは後で説明するつもりでしたし……」
「けど、あいつは魔法少女なんだろ？どうして、歪になった」
「わかりません。そうだ、兄様に連絡を」
トゥルルはステッキを奮って、携帯電話みたいなものを呼び出した。それから数回、コールしたもの、兄とは繋がらなかったらしい。トゥルルはまたメソメソと泣き出す。
わたしは少し考える。どうもおかしい、何かが変だ。嫌な予感がする。
「トゥルル、一旦糞世（ヘギュヴァ）に戻るぞ」
「え？」
「なんとなくだけど、こっちの世界からじゃわからないような気がする。あいつの本体を探ってみたほうがいい」

「よし、誰もいないな」
自分の部屋に戻って、俺は服を着替え、家を出た。幸い誰も居なかった。なのでこっそり出て行って、あの歪の本体に会ってから戻れば親父に咎められることもないだろう。
「アニータ本体の男は、ええと」
「隣の県だな。ここからだと電車で二時間はかかる。お前少しは休んでろ」
「は、はい」
ったく冗談じゃない。一生懸命やったらやったで、疲れてこんなミスをしやがる。こういうイレギュラーはもっと後に起きるべきなのだ。それなのに初っ端からこんな変な敵にあってはどうしようもない。とにかく、今回は慎重に対処しないと。
列車に揺られて、二時間。俺達はその男の居る街へたどりついた。都会でもなく、田舎でもない、古い街に新築の家が混在する街だった。けれども、どことなく廃れた感じがした。天気のせいかもしれない。雨は降っていないものの空模様は少し怪しい。
「ここか」
たどりついたのは一人暮らし用のアパートだった。壁がものすごく薄そうな、ちゃちなアパートだ。築年数は十数年程。とくに古いわけでもなく、新しくもない建物だった。
「204号室です」
トゥルルが告げたその部屋の前で、俺は立ち尽くした。そういや考えて無かった。どうやってヤツの家に上がりこむのかを。
「なあ、ここでかなの姿に離れないのか？なれないよな。やっぱ」
「え？何言ってるんですか？なれるに決まってるじゃないですか。そっちが本当の姿なんですから」
「あ、そうか。そうなのか」
「あ、でも今のたかしさんだと十五分くらいが限度ですよ」

「そうか。で、どうやってやる？」
「魔法少女に変身する要領でやれば出来ると思います。原理は同じですから」
「ステッキねえんだけど」
「そうですか、分かりました。わたしがやりますから、ちょっと待って下さい」
「待て待て！こんなところで変身して誰かに見られたらどうする？」
俺は一旦階段を降りた。アパートの裏手の駐車場、車の陰に隠れて、トゥルルに変身させてもらう。

「で、できました」
例によって、煙モクモクの後（どうにかならんのかこの煙）、車の窓ガラスを鏡の代わりにして確認した。間違いなく、かなの姿だったのだが……
「おい、魔法少女の格好にしてどうする！こんなコスプレみたいな格好で突入しろっての言うのか！」
貸せ！そう言って、わたしはトゥルルのステッキを取り上げた。さっきトゥルルがやったので要領がわかった、後はいつもやってる変身と同じ要領で変身後の姿をイメージすればいいのだ。
「えい！」
煙が晴れた後、車の窓に写った姿を確認する。こちらではまだ九月初旬だ。夏服のイメージした制服姿になっていた。
「それと」
スカートのポケットからリボンを取り出した。そんでこの間、ついでにママに教えてもらった、三つ編みおさげをして、いつも『たかしの俺』がしているメガネをかけた。
「何でそんな格好を？相手は覚えてませんよ」」
「オタクには制服が受けるんだよ。それとなんとなく嫌じゃん、そのままって」
そんな訳で、制服におさげにメガネというちょっちいつもと違う

『少女かな』に変身して、おっさんの部屋へ。
昼間だが、多分いる。ニートの感ってやつだ。今日みたいな雨が降りそう日は、特に用事がない限りわざわざ出歩かないはずだ。
ドアチャイムを押す。雨が頬に当たった。とうとう降りだした。一瞬、さっきのを思い出してヒヤッとしたが、こっちは糞世(ヘギュヴァ)なのだ。そんなファンタジーは起きない。
「そういや、トゥルル俺のビジュアルってどうなってんだ？二次元が三次元に混在したらおかしいだろ？」
「こちらのビジュアルに適当にあわせてありますから、大丈夫ですよ。わたしたちにはそのままの姿で見えますが」
なるほど。って、感心している場合ではない。こういう奴はたいてい一度では出ないのだ、二度目のチャイムを押す。何度か押せば「なんだ何処のセールスだボケ」とか思って、相手を確認しに来るに違いない。
「どうやって部屋に上がるつもりです？」
「ん？その為に女になったんだろ」
扉が開いた。出てきたのは、でっぷりとした、上下グレーのスウェットを着た、だらしない男。細い目に、今起きたばかりですと言わんばかりの、目が隠れるほどの伸びきった、寝ぐせ頭をして、鬱陶しそうな表情をしたまさにニートって感じのおっさんだった。
「あ、あの、こちらは　戸野木　悟(とのきさとる)の部屋では？」
戸野木　悟というのは俺のいとこの、今年二十三になる兄貴的存在だ。当然ここには住んでいない。女の子が間違えて訪ねたというのを装っているのだ。
「あん？知らねえけど」
「あ、あれおかしいな？ここだって聞いていたのに……」
わたしは手に握った仕込みのメモ用紙を男に見せつけた。それにはここのアパート名と２０４号室と書かれている。当然、俺がさっき仕込んだやつだ。
「あ、あの。わたしの兄なんです。ほ、ほんとうに知りませんか？」

「知らねえな。って、これとなり町じゃね？」
「え？嘘！」
雨が激しくなってきた。おっさんは少し戸惑っている。チャンスだ。
「ど、どうしよ。傘も持って来てないし、お金も残ってないし……」
わたしは上目遣いで、少し涙目で男に言ってやる。すると男は後頭部を掻いて、「仕方がないな。連絡つくまで家で……」と言った。
「ありがとうございます！」
わたしは元気よくそう言って、まんまとおっさんの家に上がりこんだ。
『う、うまくいきましたね』
『まあな。こういうロリコン野郎は女の子の悲劇に弱いもんだからな』

B―2

関で少し待たされた後、俺は部屋にあがった。本当に一部屋だけのワンルームだった。　薄暗い部屋だった。カーテンは締め切られていて、あちこちにビールの空き缶やコンビニ弁当の空き箱、食べた後のカップ麺が散乱していて、タバコの匂いが充満してる。部屋はとても散らかっていて、足の踏み場もないという感じだ。布団も敷きっぱなしだった。

女の子を部屋に入れるんだ。少しは片付けるくらいしろよといってやりたい。

『うるさい！今は女だろ！』

『何、女の子みたいなこと言ってるんですか』

『ご、ゴキブリ出たらどうしょう』

とりあえず、かろうじて座れそうな場所に腰を下ろした、そこで携帯を取り出して、兄と連絡をとる振りをする。男はしばらくこっちの様子を見ていたが、トイレの方へ消えた。　それを見計らって、部屋の隅に置かれた本棚を探った。数冊手にとって見た瞬間悟った。さっき玄関で少し待たされたのはこれを隠したかったからか。

『トゥルル、用は済んだ。帰ろう』

『え？もう？』

『もう十分だ。こんな所にいたらマジで腐っちまう』

男が戻ってきた、わたしは散らかった物を避けながら玄関の方へ

「あ、お兄ちゃんと連絡がつきました。すぐに来てくれるって、どうもお世話になりました。このお礼は必ず（バーカ！二度と来るか！キモオタ！！）」

と一応頭を下げて、帰ろうとしたが―

えっ？

男が部屋の入口、すなわち玄関へ続く短い廊下に立ちふさがった。

「そそ、そんなに急がなくたって。もう少しゆっくりしていけよ」

「あ、でもお兄ちゃんすぐに来てくれるし」
「そ、そそんなこと言うなよ、雨だって降ってるし」
「いえ……」
と、男が一歩、二歩、こっちへ迫ってくる。わたしは思わず後ずさり……
「キャッ！」
男がいきなりわたしの肩を押した。踏ん張ったがダメだった。あっけなく、かび臭い布団に押し倒されてしまった。男が覆いかぶさって来る。ちょっと待て！待てって！俺男！　馬乗りになって、両肩を抑えつけられてしまった。全く身動きできない。
何をする気だコイツ！
駄目だ！声がでない！少しぐらい抵抗できてもいいのに、全く動けない。大の大人と、中学生だ。力の差がありすぎる。糞！そうだ！元の姿にってどうやってやるんだ？
今度は両手で襟を掴んだ。一気に破るつもりらしい。ニヤリとした髭面が刻一刻と近づく。息が荒い。何を考えているのだコイツ！？イヤ！考えたくない！
嫌！こんなのイヤ！ヤメテ！！叫ぼうとしても声が出ない。どうして！！

「えい！」
声がした。同時、鈍い音がした。見ると灰皿がそこに。男が気を失う。それを見計らって誰かが手を引いた。
「逃げましょう」
俺だった。？俺だ。助けたのは俺だったのだ。気が動転して固まってしまったわたしを、俺が強引に引っ張ってアパートの外へ。
数十メートル走って、マンションの駐車場にたどり着いた。屋根がある。少し雨宿りできる。靴は俺が持っていてくれた。それを渡されてようやく靴を履く。
「びびび、びっくりした」

やっと声が出た。
その瞬間、俺は消えた。そしてトゥルルが現れた。
「おおお、お前が、たたたた、助けて、くれ、くれたたたのか？」
トゥルルはものすごく消耗して疲れていた。わたしは足がガクガク震え、唇も思うように動かなかった。
「な、泣かないで下さい。だ、大丈夫ですよ。もう追って来ませんから」
「ななな、泣いてなんか！！おおお、俺は男だぞ」
「今は女の子ですよ。その証拠にさっき全く抵抗出来なかったでしょ」
「うう、うるさい！ちょっといきなりでび、ビックリしただけだ。べべ、別に怖くなんか」
あれ、おかしいな視界が濡れている。そうだ。雨のせいだ。雨だこれは。
「と、とにかく帰りましょう」
「う、うん。あれ？おい今、変身してから何分になる？」
「え、あれ」
おかしい。もうあれからとうに二十分はたつ。それなのに元の姿に戻っていない。
「オイ。なんで元に戻らない」
「そ、そんな。ちょっと待ってください」
　トゥルルがそう言ってステッキを振るった。けれども……
「元に戻らない。どういうこと？」
「ええと、ええと……」

＊

土砂降りの雨に濡れながら、わたしたちは駅を目指して歩きました。知らない街の知らない道を。
かなちゃんは元の姿に戻りません。たぶん、さっきのショックが原因です。

結んだ髪は解け、足はまだガクガク震えています。ゆっくり、駅を目指して歩きます。まだ夕方なのに、雨のせいで暗い。街灯に明かりが灯り始め、車はヘッドライトを光らせながら走っている。そんな街をわたしたちは歩きました。

駅を目の前にして、かなちゃん足が止まりました。なぜか引き返そうとします。

「どうしたんですか」

「歩いて帰る」

「え？何言ってるんですか。ここからじゃ遠すぎますよ」

「いい。急ぐ必要ないし」

「無理ですよ。電車で帰りましょう」

「男のいるところはイヤ！！」

それから、わたしたちは土砂降りの雨の中、二駅、線路沿いに歩きました。

かなちゃんは一言も話しません。足取りはとてもゆっくり、時々止まっては、また進み、進んでは止まってしまいます。

「か、かなちゃん。やっぱり電車で帰りましょう。女性専用車両がありますから」

「うん」

そう言って、やっとかなちゃんは電車に乗る気になってくれました。でも、電車に乗っている時も、ずっと震えていました。雨に濡れたせいで寒いだけ。そう言ってごまかしてましたが、車内を移動する男の人の姿を見るだけでビクついていました。よほどショックだったのです。

兄様に連絡を取りましたがまだつながりません。マズイです。かなちゃんの精神状態が危ないです。このままでは、あちらの世界にも帰れなくなってしまい、たかしさんもかなちゃん、いずれの存在も危うくなる可能性があります。

ど、どうしましょう。わたし、わたし……

＊

「こんな格好じゃ家に上がれない」
家の前について、わたしは途方にくれた。自分の家なのに今の自分は家族の知らない赤の他人なのだ。堂々と上がりこむ訳にはいかない。親父がいたらそれこそ大事だ。
「ごめんなさい。わたしもさっき変身したので力がもう」
「お前はよくやってくれたよ。お前が居なきゃ今頃……」
また泣いてしまった。畜生！男癖に！情けない！！まったく情けない！！
その場にくずれる。塀にもたれかかって、うずくまって雨に濡れて、涙に濡れて……
「か、かなちゃん……今回のはわた、わたしのせい」
「違う、俺がうかつだった。女だってこと忘れて無茶して舐めてかかった」
「で、でも……」
「もういい、もういいよ」
わたしは頭を抱えた。リボンがない。髪がほどけている。リボン落としちゃったんだ。せっかくママに教えてもらったのに……
視界が真っ暗だ。雨の音だけが聞こえる。
もう、どうしていいのか、わからない。
わからないよ……

「何やってるのよあんた。そんな格好して、そんな所で」
「え？」
顔を上げた。そこにいたのはカーチャンだった。傘をさして、買い物袋を下げていた。
カーチャンは女の子となってしまった息子をあっさり家に入れて

くれた。雨に濡れて冷えた体を温めるように言われ、わたしはシャワーを浴びた。
「ふえッ！」
風呂場から出た瞬間、脱衣所にいたのは……
傷んだ長い茶髪、目の周りを真っ黒に塗った、生意気で全く可愛くない妹、湊（みなと）だった。
「あっ、」
妹は半裸、わたしは全裸。そして二人は互いにある一点を見つめ合った。
勝った！わたしは心の中でつぶやく。
そして残念そうに目線をそらす湊。
負けた！
間違いなくそう思っている。脱ぎかけた服をもう一回着てさっさと脱衣所を出て行った。

カーチャンが用意した服（白地の綿シャツに、薄いピンク色のスカート）を着て、（そういやこれ、去年カーチャンが買ってきて気に入らないといって一度も着なかったじゃ？それでカーチャンキレて家出したんだっけ）わたしはリビングへ向かった。
妹がソファーに寝そべって雑誌をめくっている。こっちをチラッと観たので、一応軽く会釈しておいた。カーチャンは晩飯の用意をしているように見えたが、なぜか剣を研いでいた。そしてまた片手で卵割って口へ運んでいた。
「ホラこれでも飲みな」
「あ、うん」
スープを出してくれた。わたしは食卓の椅子に座ってそれを口へ運ぶ。インスタントだったけどとてもうまかった。なんだかんだで、やっぱりカーチャンっていいな。やさしいな。ごめんな今まで。もう糞ババアなんて言いません。

「かーさん、誰その子？」
「はー何いってんの。たかしに決まってるでしょ」
って、オイ！何言ってんだよ！糞ババア！このとてつもなくかわいい美少女がお前の息子に見えるのかボケ！
「は？」
「じゃない、あれだ！た、たかしの彼女よ！」
思わず吹き出した。な、ななな、何言ってんだボケ！
「はあ！」
湊が驚愕の声を上げてこっちを観た。
「ちちち、違うよ！そそそ、そんなの！」
と、わたしは思いっきり否定するのだが、背後から気配がして、
「お、おう、かな来てたのか」と、たどたどしい俺の声がした。振り向くとやはりそこには俺がいた。
そして、
「あんた！この子彼女ってマジ？」
「あ、ああ。そうだ。か、かなは俺のフィアンセだ！」
『トゥルル！お前な！』
『すまん、妹は君の部屋で眠っている。少し無理をしたようだ。休ませてやってくれ』
『って、お兄さまの方ですか、なぜ僕にご変身を？』
『エカテリーナに頼まれたからだ。すまない、俺は君のキャラクター属性を深く知らない。だから不手際が生じても多少は多めに見て頂きたい』
「嘘だ！こんな可愛い子、あんたみたいなキモオタ好きになるわけ無いでしょ！」
キモオタで悪かったな！ビッチでくそ生意気で可愛くないブスの鼻くそ妹！死ね！
「いいから、もう部屋に行こう」
わたしはそう言って、俺に変身した妖精（兄）の手を引いてリビ

ングを出た。
扉が閉まる間際、「マジ？ねえマジで？あの子あいつの彼女？」という糞妹の声がした。そしてカーチャンは「あの子とたかしは二人で一人なのよ」と意味不明な発言で答えた。
これ以上話しややこしくするんじゃねえよ！

「大体はティオから聞いた。今管理省に問い合わせているところだが、過去にも例が無いらしく、正体はつかめないままだ」
部屋に入って、妖精（兄）はそんな事を行った。俺は、ベッドに座り、話を聞いた。
「しょ、正体なら大体検討付いている。多分、あれは……」
「そうなのか」
問題はあいつの攻撃だ。今のわたしにはあいつに対抗する手段がない。いやそれ以前に、どうやってあっちに戻る。そもそも俺は高師に戻れるのか？
「あ、あの。わた、いや俺って元の姿に戻れます？」
「元の姿はそっちだろう。ああ、この姿のことか。そういうケースも聞いたことが無いからな、調べてはみるがしばらくはそれで我慢してくれ」
冗談じゃない。何でよりにもよって家族の前で女の子やらないといけないんだ。しかも母親は正体を知っているっていうのに、なんだこの羞恥プレイは！
と、思ったところで閃いた。そうだ。アニメだ。アニメナジーを補給すればいいんだ。そうすれば、少なくともあっちへは戻れる。
「あの、お兄様。しばらく一人にしてもらえませんか」
「ん、そうか。わかった」
妖精（兄）は変身を解いた。元の美形妖精に戻った後、部屋を出ていった。
一階のカーチャンのところにでも行ったのだろう。

それを見計らって、人の枕を占有しているアホ妖精を、まあ今回はこいつのおかげで助かったことだし、起こさないように優しく抱えて移動させて、わたしは例によってアニメのＤＶＤを見ることにした。こういうときはなるべくアホっぽいほうがいいな。うん。

B—3

それから二時間ぐらいしたころだろうか、廊下の方が急に騒がしくなった。
『マズイ！いますぐ隠れろ！！』
『え？何？』
妖精（兄）テレパシーで語りかけてきて、すぐだった。
「今日という今日は許さん！あいつを引きずりだしてやる！」
親父だ。マズイ、これは非常にマズイ。
「そんなみっともないことしないの。そのうち出てくるでしょうに」
「そう言って何日になる！だいたいお前もお前だ息子を放り出して家を出て」
「それはあんたが悪いんでしょ！」
「うるさい！それとこれは関係ない！とにかく、今日は絶対に引かんからな！」
と、物凄い足音が部屋に近づいてくる。隠れなきゃ。親父に見つかった一大事だ。
わたしは、部屋中をキョロキョロみわたした。雨はまだ止んでいない。せっかく温まったのにベランダに出たらまた濡れてしまう、そうだクローゼット。わたしは眠っているトゥルルを胸ポケットに入れて、クローゼットへ隠れた。同時、親父が扉を何度も叩く。
「高師！高師！いい加減にしろ！ここを開けろ！今すぐ開けないとここを蹴破るぞ！」
どうするんだよ！開けるわけにもいかないし、どうしたらいいんだ？なんなんだこの鬱展開は！これだからやっぱりこっちは糞世（ヘギュヴァ）だ！
「は、たかしさん、おはようございます」
「シーッ」
こんな時に起きやがって。コイツの声は聞こえないだろうが、それでも物音を立てるのはまずい。慌ててトゥルルの口を塞いで、わ

たしは息を殺した。
　扉の開く音がした。
『時間停止』
　妖精兄の声だった。そして時は止まる。冗談だろ、こっちでも出来るのかよ。
「たかし、出てらっしゃい」
　カーチャンがそう言ったので、わたしはクローゼットから出た。扉の方を見ると、鬼の形相の親父が、拳を振り上げたまま固まっている。あのまま殴りこむつもりだったらしい。
「ど、どういうこと？こっちでも時間止められるの？」
「当たり前だ。この世界を含め守護妖精はすべての世界を管理している」
　そ、そうなのか。そうか、そういえば、こっちの世界のほうが仮の世界だったんだな。
「とは言えあまり長い時間は止まれない、糞世（ヘギュヴァ）は管轄が違うからな」
「それで、あんたまだ元に戻れないの？」
「わからない。さっきより落ち着いているけど、でもその前に、向こうへ行かなやきゃ」
「そう、ならさっさと行っちゃいなさい」
「え、でも親父……」
「それなら任せなさい、帝王（カイザー）がうまくやってくれるっちゃ」
　コイツに任せて大丈夫だろうか。でも、今はこっちの世界の事情に構っている余裕なんてない、とにかくあっちへ戻らないと。
「でも、たか、じゃないかなちゃん、大丈夫ですか？今行けば、あの歪と戦うことになりますよ」
「う、うん。なんとか」
「ど、どうするんですか？あの触手。さっきの二の前になってしまわないか……」
「「触手？」」
　妖精（兄）とカーチャンが異口同音に言った。

「そんなら、オラが戦っちゃろうか？前に戦ったことあんぞそういうのと」
「たしか、ワルプス谷に向かう途中の毒キノコだったな。エカテリーナが口へ入れた途端、触手が出て襲ってきたな」
「あんときゃ結構焦ったよな。森中のキノコが触手出して襲ってきたかんな。帝王(カイザー)の携帯も飲み込まれたし。まあ一匹残らず切ってやって全部食ってやったけどな。あれ以外といけたな」
食ったんかよ！んなもの食うなよ！てか、トゥルルが連絡取れなかったのはカーチャンのせいだったのかよ。一体どんな冒険をしているんだよ！
「しかし、違う世界の人間がいたずらに介入するのはマズイ。世界を乱すおそれがある」
そうなのか。そりゃそうだろうな。いや、そんな問題じゃない。あいつはわたしの敵だ。自分の敵は自分で倒さなきゃ。でもどうする？あの触手。悔しいがあれに対抗する手段が無い。
「そうか、そんならせめてこれで持っていけ」
どこに隠し持っていたのか、カーチャンはこの間手に持っていた両刀剣を差し出した。
「XYZソードってんだ。なかなか強えーぞ。触手はこれでぶった切ればええさかいにな」
またそのしゃべり方かよ。せめてカーチャンの時は辞めてもらいたいのだが。
とはいえ、剣はなかなかの良案だ。わたしはそれを受け取る事にした。
「あ、でもこれないと、ママ、じゃないカーチャン困らない？」
「でーじょびだ。セカンドもサードもある」
「猛獣とやりあうたびに串代わりにして焦がしてしまうのでな、予備を常に用意しておくことにしているんだ」
妖精（兄）も色々大変だなオイ。つか、俺のカーチャンってそんなにアホだったのか。

「じゃ、これ、借ります。トゥルル、準備はいい？」
「は、はい」
「それじゃあ行くね、後のことは……」
「でーじょび、でーじょび！オラと帝王（カイザー）がうまくやっちゃるばいよ」
トゥルルがステッキを振るう、それと同時に、妖精兄が「時間停止解除」を宣言、わたしたちはフェードアウト、消える間際、親父が動き出した。何か叫んでいる。
その後のことは知らない。とにかく、今は敵を倒すことを考えなければ。

「さ、トゥルル。準備は良い？」
「か、かなちゃんこそ。大丈夫ですか？」
玄関で靴を履く、少し手が震えていた。やっぱりさっきのやつと戦うのは……
「どこ行くのよ。もう夕飯だっていうのに」
廊下の向こうからママがやってきた。エプロン姿だった。
「あ、ちょっと買い忘れしたものが」
「明日にしなさいよ」
「い、急ぎなの」
「そうなの？でも外はものすごい雨よ」
ちっ、何でこういう時に限ってリンクしてやがるんだ。
『さっきの歪のせいですね、天候の一致は糞世（ヘギュヴァ）への近づきを意味します』
『そうなのか？』
『ええ、歪を放っておくと、どんどん糞世に近づいて、やがては飲み込まれます』
なんだと、あの野郎！わたしだけでなくこの世界まで犯そうとしている！許せない！
「ママごめん、夕飯までには戻ってくるから」

「気をつけなさいよ、今朝のニュースのこともあるし、この辺りみたいだし」
ママがわたしの手を握った。少し強く握った。傘これ持って行きなさい。と言ったが、いつまでも離さない。心配してくれているんだ。どうしよう、明日にしようか。だめだ。ママのためにもあんなやつ法っておけない。この世界は、わたしが守るんだ。
「だ、大丈夫だよ。すぐ近くだし」
「そう」
わたしはママの優しい手をゆっくりほといて、そして家を出た。
傘はとても可愛らしい花柄模様だった。雨に濡れるのがもったいないくらい綺麗だ。
「トゥルル、ヤツの居場所は？」
「ここから十キロ、浜辺の空き地です」
ここからじゃ少し遠い、自転車を乗るには雨が強すぎる、わたしはハートのステッキを振るった。視界に無数のリボンが広がる、ピンクに輝くもやが現れて、軽快なリズム音が脳内に響く、踊るようにステップを取って回転し終えると、私は魔法少女に変身した。
「変身シーンを追加してみた。どう？」
「お、お見事です……」
何で口ごもるんだよ。全く、コイツは魔法少女が何たるかちっとも分かっていないないな。

魔法少女に変身してから、わたしは雨の道を駆け抜けた。体が軽い。普通の時の数倍の速度で走り、そして目的地へたどりついた。
防砂堤がわりの松の木が無数に植えられた、白い砂利がそのままになった空き地だった。　だがヤツの姿は無かった。
「おかしいですね、気配は察知しているんですが」
「いいえ、来る！　」
トゥルルがパソコンみたいなやつの画面を見ながらそういった。
その瞬間、真っ黒な巨人は現れた。わたしは吹き飛ばされないよ

うに必死でこらえた。

出現と同時、雨に混じって白い液体を飛ばしてきた。あれにあったら服が溶ける。わたしは飛びながら後ろへ下がり交わす。

「ギュヒヒヒヒヒヒヒュ！」

気持ち悪い笑い声を上げながら巨人は汚い水を撒き散らす。

「そうだ、傘」

そういえば、脱がし雨のへの対策は考えていなかった。だが、ママが傘をくれたお陰で、これに魔法コーティングをしてやればあの雨に濡れなくて済む。

わたしはステッキを奮って傘に魔法を施した。傘はキラキラと輝き出す。

今度は、バケツをひっくり返したような水の塊を飛ばしてきた。だけどわたしは傘を前に差し出して、くるくる回転させその水を弾いた。

その攻撃は何度も襲ってくる。わたしは傘を回転させながら前へ、前へと進む。

「かなちゃん！右！」

数本の触手が蠢きながら襲ってくる。わたしは間一髪後ろへ下がりかわした。

「キュヒヒヒヒヒッ！」

巨人は気味の悪い声を上げて笑う。

「カーチャン！使わせてもらうわ」

わたしはまたステッキを振るう、すると、カーチャンことエカテリーナ三世から借りた、　ＸＹＺソード（ちなみにこれはもう後がないという意味らしいです）をが姿を表す。

「お、重い」

さっきは床についていたから分からなかったが、いざ持ち上げてみるとものすごく重く感じた。よくこんなの振り回している。どんなキャラなんだカーチャンは。

けれどもわたしは目一杯力を込めてその件を振るった。そして触

手を叩ききってやった。
「ぎゃあああ！」
　たった数本切っただけで、巨人本体が悶絶した。そうか、こいつの感覚はこの触手に集中しているんだ。ならば触手こそが、弱点！
　わたしは左手に傘、そして右手に剣を抱え、そして地面を蹴った。
「乙女の純情を汚す、キモオタ！あんたみたい奴は！わたしが許さない！」
　わたしは傘を手放す、そして両手で剣を抱えると、巨人から伸びる無数の触手めがけ、　一気に振り落とした。
「あんたみたいなキモオタヒキニートは、みんな、みんな死んじゃええ！！」
　触手は一つ残らず両断。巨人は奇声を発して悶え苦しんむ。
「二次元少女をそんな目で見るんじゃない！アニメを観るんだったら、ちゃんと見なさい！物語を！キャラクターを！そんな汚れた目的のなら、ＡＶでも観てろ！この、ロリコン、変態キモオタニート！」
　重い剣が地面に重力に従って落ちてゆく、そして地面に突き刺さった。
　わたしはステッキで弓を描いた。そして現れたアーチェリー。
　ハートの矢を思い切り引く、そして打つわたしの怒りの一撃！
「アニメってのはね、暇つぶしじゃない！現実逃避の道具じゃない！心の癒しなのよ！」
　ハートの矢は一直線、巨人のど真ん中へ。
「グオォォォォォオ！」
　巨人の腹部に巨大な風穴が開く。巨人は喚きながら悶え苦しむ。
　わたしは地面に降り立つ、巨人はついに形を失って跡形もなく消えた。
　雨があがる。
　雲間から赤い夕陽がさす。海岸には、雲間からこぼれ落ちた光が

虹を描いていた。
　魔法が解ける。元の服に戻った。わたしはしばらく、動けなかった。
その光景が、あまりにもきれいだったからだ。
「勝った」
「かなちゃん！お見事です！すごいです！今回はとってもカッコよかったです！」
「バカ、今回もだろ」
「え、ええ！」
「と、ところで、どうやって帰ろう？もう今日は魔法少女になれないし」
「バスは？」
「バカ、金なんて持って来てないって」

すっかり日がくれて、夕飯の時間を過ぎてわたしたちはようやく家についた。
「バカ！」
玄関を入るなり、ママに頬をぶたれた。
「どこ行ったのよ！心配したじゃない」
「ご、ごめんなさい」
「何をしてたのよ！」
心配かけてしまった。申し訳ない気持ちでいっぱいだった。けれども、事情は言えない。「り、リボン……なくしちゃって」
「そんな事のために」
ママはわたしをぎゅっと抱きしめた。雨にぬれて冷えた体をそのまま。
「そんなのまた買えばいいでしょ、あなたに何かあったらどうするの」
「ごめんなさい」

「こんなに冷えちゃて、お風呂湧いているから今すぐ入りなさい。風邪引くわ」
「うん……」
　わたしはママが用意してくれたタオルで軽く体を拭いてから部屋へ上がった。
『トゥルル、お前も一緒に入ろう』
『え、イヤですよ。変態！』
『何言ってんだよ。女同士だろ？変態も何もあるか』
『そ、そうか。そうですよね』

「にしても今回の歪は一体どういうことだったんでしょうね？わたしのレーダにはちゃんと、純度も問題なクリアしていたんですが、わたし歪と資格者を間違えるなんて……」
　わたしは湯船に浸かり（やっぱりシャワーより湯船だよな）、雨で冷えた体を温めた。
　トゥルルは洗面器の中に浸かっている。聞けば、今まではわたしたちが寝静まった後にこっそりと入っていたらしい、これからは一緒に入ってやらないとな。冷蔵庫の中の者が勝手に無くなっている事がよくあるらしいが、もしかしてそれもこいつの仕業だったり？
「いや、お前は間違っていないよ。純度は確かにあったんだろうよ。一時的にだけどな」
「え？どういうです？」
「こっちへ来るのに必要な心の純度って、どれだけ現実、つまり糞(ヘギ)世(ユヴァ)のことを忘れて、アニメ世界に陶酔しているかってことだろ？」
「ええ、そうですが、歪(ひずみ)を出す人はそもそも陶酔でき無いはずなんです」
「あいつの家に言った時さ、本棚に隠してあった複数の同人誌なんだけど、あれ全部エロ絡みだった。つまりだ、あいつはそれ目的だけでにアニメを見ていたんだ。アニメをアニメとし楽しんでしたん

じゃない、つまりその……」
「その、なんですか？」
言えるわけ無いだろバカ！　これ以上いわせたら風呂に沈めるぞ。マンマの意味で！
「それにしてもおかしいです。一時的にしろ、わたしのレーダに反応したのは」
「だからそれも、その……つまり、あれだ、ほら、ええと、要するに、一時的に現実を忘れてアニメ世界に陶酔したのんだよ……たぶん、説明しづらいけど」
「ええと……どういう理屈で？」
わたしは顔を赤らめて押し黙った。するとトゥルルも察したらしく……
「わわ、ええと……ええと」
「そ、そもそもおっさんを魔法少女にしようとしたところが間違いだったんだよ！」
「そのことについては本当に申し訳なく思っています。重々反省します」
「いいよ。終わったことだし」
ちょっと怖かったけどな。マジで。
でも今回は、カーチャンとママ、母親の愛に助けられたな。これからは、親をもっと大切にしないとな。ホント、母親ってすごいよな。
「さ、御飯食べよ。おなかすいたし」
「なんだかかなちゃんすっかり女の子になっていますね」
「あ、当たり前だろ！」
翌日、俺達はまたあのおっさんのアパートにやってきた。今は高師の姿だけど、やっぱりちょっと近寄りがたい。足が震える。俺は恐る恐る、そいつの部屋にちかづいて、そしてドアのポストに、Ｄ

ＶＤを一枚放り込んでやった。
「お、お前はあんなコトしたんだからＴＶ録画版だ！ＣＭ付が嫌なら自分で買え！」
と、言ってから猛ダッシュして逃げた！一刻も早くこの場から離れたかったからだ。
ちなに、放り込んでやったのは少年が空から降ってきた少女と出会い、空に浮かぶ島を目指して旅をする、あの名作だ。純粋にアニメを楽しむにこれ以上の適作は存在しない。
「トゥルル、帰りにアイスでも食っていこうぜ」
「たかしさん、いまは男の子ですよ？」
「うるさい、食いたい気分なんだ！文句があるならお前には分けてやらん！」
「わー、たかしさんっ太っ腹！！」
「あのな……」

その後、家に帰ってから居れは親父にこっぴどく叱られた。
「お前は学校もろくに行かず、家でゴロゴロしているかと思えば、今度はなんだ！部屋に女の子を連れ込んで、それでもって……と、とんでもない……、その……、ふしだらな事をして！いい加減にしろ！！」
という、全く身に覚えのない事で物凄い叱られた。
聞けば、あの後、部屋に突入する親父をカーチャンが後ろから強打して気絶させ、そして気がついた親父に「高師が彼女といちゃついているシーンをみてショックで気絶した」と、嘘八百を吹きこんだせいで、親父は俺を完全に誤解した。
で、今日、タイミング悪く出張から帰ってきた親父に出くわした俺は、このいわれのない罪で親父にこっぴどく叱られる事になってしまったのだ。理不尽だ。
つか、やっぱりロクな事しねえな！糞ババア！！

ちなみに、その時間たかしさんは一切お父様に反抗できず、怯えて、ただ静かに（厳密には涙をこらえて）黙って叱られていたのでした。どうしてでしょう？

「黙ってろ！クソ妖精！！（ｂｙたかし）」

◆次回予告◆

かなです！トゥルルです！カーチャだ！

ってオイ入ってくるなよ！

いやーすまんすまん！オメーらが面白れー事しちょるばいついついな。あ、いい忘れたけど、あんたお父さんのへそくり取ったでしょ？契約金の２５万、払えるわけないもんね。

え、ええ？

いいわよ別に。あたしも取ったから２５万。まあそのせいで夫婦げんかになったけどね。最終的には自分が使って忘れてるだけだろボケオヤジってことで黙らせたけど。

オイオイ、俺のカーチャンってこんな奴だったんかよ。っておい、次回予告、次回予告！　そんな訳で次回は新たな魔法少女が登場するよ☆ホントだろうな？

ええ、今度こそ本当に。本当ですってば！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9370x/

魔法少女マジかる?めたモル！かな☆彡

2011年10月28日19時13分発行